

復興大臣
今村雅弘様

東日本大震災津波からの復興に
当たっての提言・要望書

平成28年8月6日

岩手県知事 達増拓也

東日本大震災津波からの復興 に当たっての提言・要望書

東日本大震災津波から5年4ヶ月が経過しましたが、本県においては、未だ1万8千人余りの方々が応急仮設住宅等での生活を余儀なくされており、依然として厳しい状況におかれています。

国におかれましては、これまで、復興交付金や震災復興特別交付税による財政支援や復興特区制度の創設などの手厚い支援措置を講じていただいたところです。

加えて、昨年6月には、復興財源フレームを決定され、本県が必要と見込んでいる国費が概ね確保されるとともに、三陸沿岸道路の整備や任期付職員の経費等に関する国の全額負担の継続など、本県の要望も踏まえた今後5年間の支援方針をお示しいただいたところです。

これまでの国の御支援もあり、本県被災地においては「『安全』の確保」「『暮らし』の再建」「『なりわい』の再生」それぞれにおいて復興が進んでおりますが、その一方で、応急仮設住宅など不自由な生活の長期化に伴うところと体の健康問題や、防災集団移転促進事業等の進捗に伴う移転元地の利活用、区画整理事業の進捗に伴う中小事業者の事業再開への支援などの課題も顕在化しており、こうした新たな課題に県として全力で取り組んでいく必要があります。

本県における復興の推進には、復興を支える確実な予算措置などが不可欠であり、国におかれては、今後も引き続き、これらの課題に全力を挙げて取り組まれますよう、強く要望いたします。

東日本大震災津波からの復興関連事項

I 最重要事項

- | | | |
|---|--------------------------|---|
| 1 | 復興に必要な予算の確実な措置 | 1 |
| | (全省庁) | |
| 2 | 被災地復興のための人的支援 | 3 |
| | (全省庁) | |
| 3 | 移転元地の利活用に向けた支援 | 5 |
| | (復興庁・国土交通省) | |
| 4 | ラグビーワールドカップ 2019 開催に係る支援 | 8 |
| | (復興庁・総務省・文部科学省・国土交通省) | |

II 復興に必要な重要事項

II-1 横断的事項

- | | | |
|---|---|----|
| 5 | 原子力発電所事故に伴う放射線影響対策の充実・強化及び被害に係る十分な賠償の実現 | 10 |
| | (総務省・文部科学省・農林水産省・経済産業省・環境省) | |
| 6 | 原子力発電所事故に伴う除染・廃棄物処理等への対応 | 12 |
| | (環境省) | |
| 7 | 原子力発電所事故に伴う農林水産被害等への対応 | 15 |
| | (消費者庁・復興庁・農林水産省・林野庁・水産庁) | |

II-2 「安全」の確保

- | | | |
|----|---|----|
| 8 | 直轄事業の着実な推進 | 21 |
| | (復興庁・国土交通省) | |
| 9 | 社会資本整備総合交付金(復興)の復興の進度に応じた確実な予算措置 | 24 |
| | (復興庁・総務省・国土交通省) | |
| 10 | 被災地の繰越手続の簡素化及び復旧・復興の進度に応じた予算配分 | 25 |
| | (復興庁・財務省・水産庁・国土交通省) | |
| 11 | 高田松原津波復興祈念公園への支援と国営追悼・祈念施設(仮称)及び重点道の駅「高田松原」の早期準備等 | 26 |
| | (復興庁・国土交通省) | |

12	津波対策施設に係る維持管理費等に対する財政支援	28
	(復興庁・総務省・農林水産省・水産庁・経済産業省・国土交通省)	
13	JR山田線(宮古・釜石間)の早期復旧への支援	30
	(復興庁・総務省・国土交通省)	
14	警察施設の復旧及び交通安全施設等の整備事業に係る財政支援	32
	(警察庁・復興庁・総務省)	
15	広域防災拠点整備に対する財政支援	34
	(内閣府・総務省)	

II-3 「暮らし」の再建

16	被災者の生活再建に対する支援	35
	(金融庁・復興庁・総務省・財務省・国土交通省)	
17	地域公共交通確保維持改善事業における被災地事業の補助対象の見直し	38
	(国土交通省)	
18	医療提供施設や社会福祉施設の復旧・復興に向けた支援	40
	(厚生労働省)	
19	教育の復興に対する支援	42
	(復興庁・文部科学省)	
20	復興支援活動を行うNPO法人等への支援の継続	47
	(内閣府・復興庁)	

II-4 「なりわい」の再生

21	水産業の復旧・復興支援	48
	(復興庁・農林水産省・水産庁)	
22	被災企業等への支援策の継続	52
	(復興庁・総務省・経済産業省・中小企業庁)	
23	被災地における産業人材の確保	56
	(内閣府・復興庁・法務省・厚生労働省)	
24	観光復興に向けた支援策の拡充	59
	(国土交通省)	

Ⅲ 新しい東北の創造に向けた重要事項

- 25 再生可能エネルギー導入促進に向けた支援…………… 61
(復興庁・経済産業省・環境省)
- 26 国際リニアコライダー(ILC)の実現…………… 64
(内閣府・復興庁・文部科学省・経済産業省・国土交通省)
- 27 東北マリンサイエンス拠点形成事業の継続及び高度専門人材育成拠点の整備への支援…………… 65
(復興庁・文部科学省)
- 28 国際海洋再生可能エネルギー研究拠点の構築…………… 67
(内閣官房・文部科学省・農林水産省・経済産業省・国土交通省・環境省)

1 復興に必要な予算の確実な措置

震災からの復旧・復興事業に対しては、これまで手厚い財政支援措置が講じられてきたところであり、平成 27 年 6 月には、平成 28 年度以降 5 年間の財源フレームが閣議決定され、平成 32 年度までに必要となる国費が確保されたことにより、平成 28 年度以降 5 年間に予定されていた事業が実施可能となったところです。

また、国の平成 28 年度予算においては、被災者支援総合交付金が大幅に拡充されたほか、東北観光復興対策交付金が創設されるなど復興のステージに応じた取組が可能となったところです。

今後においても、復旧・復興事業に必要な予算の確実な措置と被災地方公共団体のニーズに対応するための財源措置の充実が必要となることから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 復興に必要な予算の確実な措置

国においては、平成 27 年 6 月に決定された「平成 28 年度以降の復旧・復興事業について」に基づいて、復興に必要な予算が確実に措置されるよう要望します。

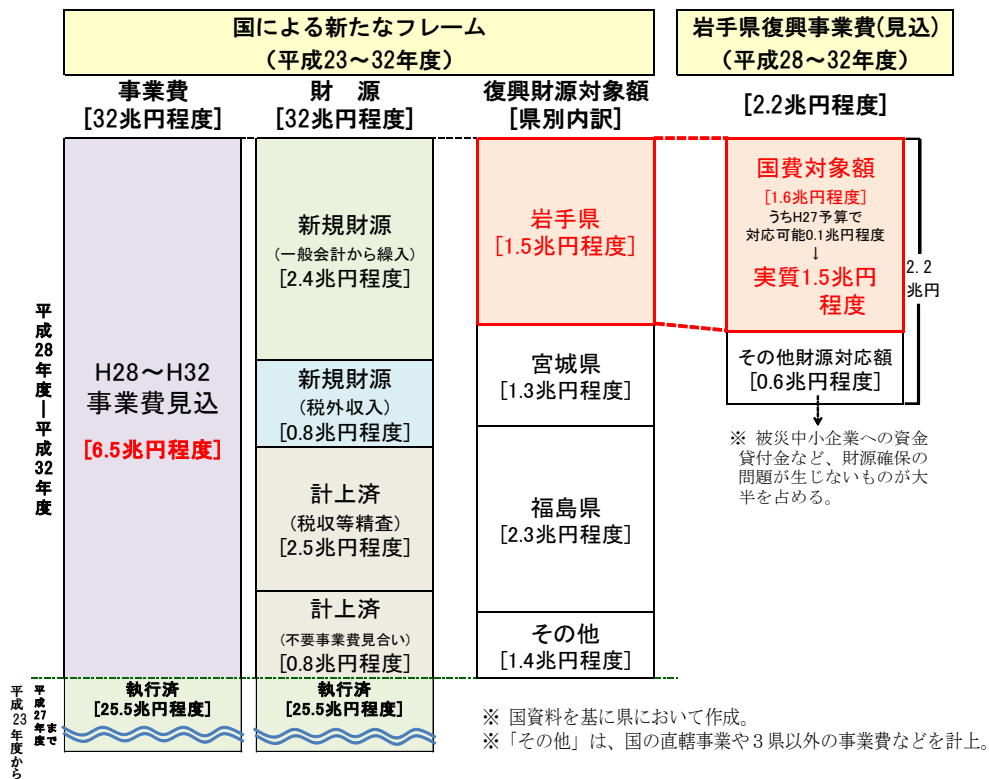
2 財源措置の充実

被災地方公共団体において、今後具体化が進むまちづくりの進捗に応じ、住民生活の安定や地域経済の振興に向けた事業を継続的・安定的に実施できるよう、使途の自由度の高い交付金等、従来の枠組みを超えた財源措置の充実を図るよう要望します。

【現状と課題】

1 復興に必要な予算の確実な措置

- 国においては、平成 27 年 6 月に平成 28 年度以降の復興支援の枠組みを決定。
- 災害復旧・インフラ整備・まちづくり・心のケアなど、主要な復興事業は、ほぼ全てが引き続き復興特別会計で実施されることとなった。
- また、国において、被災 3 県（岩手県・宮城県・福島県）が試算した復興事業費をベースに、H28～H32 に必要となる国費（6.5 兆円）を確保。
これにより、岩手県・市町村が必要と見込んでいる国費は概ね確保。



- 平成 27 年 6 月に整理された国の特例的な財政支援が継続されるよう、必要な予算の確実な措置が必要。

2 財源措置の充実

- 各種復興事業の進捗に応じ、変化するニーズに対応した取組が必要。
- 国においては、平成 28 年度予算により、「被災者支援総合交付金」を大幅に拡充し、被災者の生活再建のステージに応じた、切れ目ない支援の実現を図るほか、新たに「東北観光復興対策交付金」を創設し、地域からの発案に基づいたインバウンドを呼び込む取組を支援することとされた。
- 平成 29 年度以降においても、住民生活の安定や地域経済の振興に向けた事業を継続的・安定的に実施できるよう、使途の自由度の高い交付金等、従来の枠組みを超えた財源措置の充実が必要。

【県担当部局】復興局 復興推進課
政策地域部 市町村課

2 被災地復興のための人的支援

復興に係る人的支援とその財源措置については、平成28年度から5年間は職員派遣に要する経費を引き続き震災復興特別交付税の対象としていただくなど、特別の支援をいただいているところです。

復興事業を迅速かつ着実に行うためには、各分野において専門的知識を有する人材が必要であり、また、今般の熊本地震など全国的に災害が多発する中で、復旧・復興業務に従事するマンパワーの確保は今後の重要な課題の一つとなることから、その人員確保について、引き続き強化するよう要望します。

《 要 望 事 項 》

1 人的支援に係る総合的な調整機能の強化

復興事業が本格化・長期化している中で、引き続きマンパワーが必要となることから、全国の地方公共団体等からの人的支援に係る総合的な調整機能の強化について要望します。

また、独立行政法人や民間企業を退職した者の任期付職員としての採用を支援するほか、被災地方公共団体と国（国家公務員）との人事交流を促進するよう要望します。

2 民間企業等からの人的支援の推進

関係団体等へ継続した働きかけを行うとともに、被災地方公共団体との丁寧なマッチング調整を行うなど、円滑な受入れについて支援するよう要望します。

【現状と課題】

1 職員確保の状況

- 平成28年度は、任期付職員の採用、再任用職員の積極的活用、他県応援職員の要請等に取り組んだが、依然として職員数は不足しており、市町村においては、前年度の確保数を下回っている状況でもあることから、復興事業が本格化・長期化している中で引き続きマンパワーが必要。なお、正規職員を中心に、土木職の採用が困難な状況。
- 特に、被災市町村における復興まちづくりでは、平成27年度末現在、宅地供給区画の完成数は3割と進捗に遅れが見られるなど、来年度以降も引き続き相当数のマンパワーが必要となる。

《岩手県における職員確保状況》

(H28. 4. 1現在)

年度	正規職員	任期付職員	他県応援職員	再任用職員	合計	不足数
H26	133人	77人	170人	59人	439人	▲72人
H27	149人	59人	172人	93人	473人	▲145人
H28	165人	69人	164人	110人	508人	▲139人
増減	+16人	+10人	▲8人	+17人	+35人	—

《市町村における職員確保状況》

(H28. 4. 1現在)

年度	必要数	確保数	不足数	確保率
H26	737人	697人	▲40人	94.6%
H27	777人	715人	▲62人	92.0%
H28	734人	672人	▲62人	91.6%
増減	▲43人	▲43人	—	—

2 任期付職員の採用の状況

- 被災市町村の任期付職員は、都道府県による代行採用・派遣や被災市町村の独自採用により確保しているが、応募者は減少傾向。特に技術職員の応募が少なく、市町村において苦慮。
- 派遣職員のメンタルヘルスケアのための経費については一部が震災復興特別交付税の対象。

3 民間企業等からの人的派遣制度

- 総務大臣による団体への働きかけが実施されているが、民間企業では地方公共団体への派遣実績が少なく、マッチング調整の難しさがあり、受入の拡大には自治体の詳細なニーズ把握や行政実務への民間人材の適応確認など、より丁寧な調整が必要。

【県担当部局】 政策地域部 市町村課

総務部 人事課

農林水産部 農村計画課、水産振興課、漁港漁村課

3 移転元地の利活用に向けた支援

市町村が進める防災集団移転促進事業などによる高台移転については、全ての事業箇所ですら工事に着手するなど一定の見通しが立ったところです。このような状況を受け、被災地では防災集団移転促進事業により市町村が買い取った土地（以下「移転元地」という。）の利活用に向けた検討が本格化しています。

移転元地の利活用促進については、これまでも、利活用する区域内にある民有地と当該区域外にある公有地を交換する場合において課税される登録免許税を免除する等の措置をいただいているところですが、復興・創生期間内に各地域の実情に応じた基盤整備を実現できるよう、柔軟な制度運用、現行制度の改善等に係る取組を、より一層強化していただくよう要望します。

《 要望事項 》

1 移転元地に係る復興交付金制度の柔軟な運用

移転元地を活用した復興事業の実施を促進するため、復興交付金制度のより一層の柔軟な運用について、次のとおり要望します。

- (1) 地域住民の合意を得て策定した土地利用計画に基づく事業について、地域住民の意見を十分尊重し、復興交付金を柔軟に運用するよう要望します。
- (2) 復興事業の実施のために土地交換を行う場合の事業実施区域外の土地について、土地交換に必要となる土地境界確定のための費用のほか、土地交換の促進を図るため、家屋基礎の除却費用等について、復興交付金により措置するよう要望します。
- (3) 産業用地としての民間ニーズに適時に対応するとともに、維持管理が市町村の大きな負担にならないよう、公有地の集約と必要最小限の整備に要する費用について、復興交付金により措置するよう要望します。

2 移転元地の集約のための新たな制度・手法等の検討

移転元地の集約を円滑かつ速やかに進めるため、簡素な手続により地域ぐるみの土地交換ができるような制度や被災地域の実情に即した現行手続の柔軟な運用について、検討するよう要望します。

【現状と課題】

- 防集移転元地及びその周辺の区域は、災害危険区域に指定され、住宅の建築が制限されるとともに、多くの場合、公有地と私有地が混在している状況。
- 移転元地の利活用は、地域のなりわい・にぎわいの再生に資することはもとより、安全衛生、維持管理、そして国土の有効活用の観点からも重要な課題。
- 移転元地の利活用に向けた市町村の検討状況は下表のとおり。(H28.5月現在)

計画策定済	計画策定中	未検討	事業予定なし	合計
35地区(46%)	24地区(32%)	7地区(9%)	10地区(13%)	76地区

※ 防集事業実施7市町村(野田村、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市) 取りまとめ

※ 「計画策定済」の地区は、土地利用計画と主な事業について地域合意形成が図られた地区であり、一部計画策定済の地区を含む。

1 移転元地に係る復興交付金制度の柔軟な運用

- これまで、復興交付金制度においては、防集移転元地において低廉な広場や駐車場、イベントスペース等の整備が可能となる等、これまで運用の柔軟化がなされてきたところであるが、依然として、広場の規模等の妥当性等の判断から事業が認められない事例があることから、地域住民の意見を十分尊重し、より柔軟な運用が必要。
- 土地交換に当たっては、被災して不明瞭となっている土地の境界を明確にするため土地境界確定測量や等価交換を行うための分筆測量が必要。
- 土地交換に当たっては、移転元地に家屋基礎や地下埋設物等が残っていること、被災に伴い道路ほか周辺土地との段差が生じているなど、相手方が交換先に優位性を見いだせないことが課題となっていることから、土地交換の促進のため、これらの費用が必要。
- 公有地と私有地が不規則に混在し、公有地が点在している状況では、将来における有効活用の阻害要因となるとともに、財産管理において著しい負担となるほか公衆衛生上の問題の発生も懸念されることから、移転元地の利活用に係る事業を実施しない土地についても、土地交換を行う土地と同様に、土地境界確定のための測量費用のほか移転元地の家屋基礎や地下埋設物等の除去費用や段差解消のための整地費用等管理のための最小限の整地費用等が必要。

2 移転元地の集約のための新たな制度・手法の検討

- 移転元地を集約・一体化する際、個別交渉による土地交換は多大な時間と労力が必要。
- 市町村施行の土地区画整理事業は、これに代わる有効な手法の一つであるが、都市計画区域外では施行できず、また、手続きが煩雑で長期にわたることから、本県被災地のような小規模集落を早期に整備する場合においては適さない状況。
- 個人施行の土地区画整理事業(柔らかい区画整理)は、様々な手続きが省略でき、比較的短期間で事業実施が可能であるが、同様に都市計画区域外では施行できず、また関係者全員の同意が必要であることから実施を断念した地区もある状況。
- また、被災市街地復興土地区画整理事業を導入できない都市計画区域外では、私有地を含む地域全体の土地の嵩上げをすることが出来ず、宅地ごとの高低差により、一体的な利活用の課題となっている状況。
- 前述のとおり、被災地における移転元地の土地交換には様々な課題があり、また、土地区画整理事業の活用ができない地域も少なくないため、市町村において鋭意調整を進めても、なお土地の集約が円滑に進まない場合も想定。

○ そのため、被災地の実情に即し、簡素な手続により土地を集約できる制度^(※)や土地の集約における手続の柔軟な運用についても、併せて検討することが必要。

※ 土地改良法における交換分合は、農用地に限られているが、地権者の2/3の同意で施行可能であり、かつ比較的簡素な手続で集約化が可能な制度の一例。

【県担当部局】復興局 まちづくり再生課

4 ラグビーワールドカップ 2019 開催に係る支援

岩手県・釜石市は、平成 27 年 3 月にラグビーワールドカップ 2019 の開催都市に決定したところであり、スタジアム等の整備に対して、復興交付金による約 17 億円の支援を決定していただいたところです。

本大会開催期間中には、国内外から延べ 30 万人が来訪する見込みであるなど、今後、スポーツ観光等を通じた交流人口の大幅な増加が見込まれています。また、東日本大震災津波からの復旧・復興のために、国内外からいただいた御支援への感謝を伝えるとともに、復興の姿を日本国内のみならず、全世界に向けて発信する絶好の機会と捉えています。

岩手県・釜石市が開催都市において唯一の被災地であることや、本大会が東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた機運醸成に大きな役割を果たし得る世界規模の大会であることを踏まえ、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 スタジアム等の整備に向けた財政支援

ラグビーワールドカップ 2019 を成功に導くため、釜石市が行う試合会場整備等に対し、次のとおり財政支援措置を行うよう要望します。

- (1) 大会開催に必要となるスタジアムの整備及び大会運営に係る地元負担額の軽減
- (2) 地方負担に対する過疎対策事業債の配分枠の十分な確保
- (3) 会場及びアクセス道の整備に対する、社会資本整備総合交付金の十分な確保
- (4) 日本スポーツ振興センター（J S C）において創設された、関係施設の新設等への助成制度に係る十分な予算確保

2 復興道路及び復興支援道路の早期完成

観客等が会場地である釜石市に円滑に移動できるように、三陸沿岸道路、東北横断自動車道釜石秋田線等について、大会開催に間に合うよう着実な整備を進めるよう要望します。

【現状と課題】

1 スタジアム等の整備に向けた財政支援等

- ラグビーワールドカップ 2019 開催のためには、15,000 人以上収容可能なスタジアムが必要とされており、釜石市においては、大会に必要な水準を満たし、かつ地域の将来像を見据えた多面的活用が可能となる施設・設備の早急な整備が必要。
- 開催時には多くの交通量が見込まれるため、アクセスに必要な周辺市道も緊急に整備することが必要。
- サブグラウンド及びアクセスに必要な周辺の市道に係る整備に際して、社会資本整備総合交付金の十分な確保による財政支援が必要。
- 釜石鶴住居復興スタジアム（仮称）概算整備費及び財源見込みの状況（H28.4 現在、単位：百万円）

区分		整備財源	全体事業費	交付決定(見込)額	地元負担
基盤整備・公園整備		復興交付金 (震災特交含)	1,655	1,655	0
スタジアム整備等	サブグラウンド	社総交	144	72	72
	常設分	JSC	904	582	194
	仮設分	未定	465	0	H29を目途に調整予定
	基本設計費等	釜石市単費(既支出)	30	0	30
合 計			3,198	2,309	—

- ・ 日本スポーツ振興センター（JSC）が、「東京オリンピック・パラリンピック競技大会等開催助成（平成28年度追加基準）」について、平成28年5月9日から募集を開始。
- ・ 新設事業に対して、助成割合4分の3（助成金限度額：15億円）とされているもの。
- ・ 仮設分への支援については、JSC及び関係省庁へ要望を行ってきたが具体的な動きは無し。

- 釜石市においては、ラグビーワールドカップ2019の開催により交流人口が増加するほか、その後もスタジアムを活用した各種スポーツ振興等により継続的な交流人口の増が図られるなど、本事業は過疎地域の自立に必要なものであるとして過疎対策事業債の発行を予定しているが、本県の過疎対策事業債の配分枠は例年160億円程度であり、県内市町村の要望額（200億円前後）を満たしていないことから、過疎対策事業債の配分枠の確保が必要。

2 復興道路及び復興支援道路の早期完成

- 釜石市のみでは、国内外からの多数の観客の宿泊に対応できないことから、ラグビーワールドカップ 2019 の成功のためには、盛岡市や花巻市等の宿泊地からの円滑な輸送が不可欠。
- 東北横断自動車道釜石秋田線（仮称）釜石西 IC～（仮称）釜石 JCT 間や、三陸沿岸道路（仮称）釜石 JCT～釜石両石 IC 間などについて、ラグビーワールドカップ 2019 開催に間に合うよう、着実な整備が必要。

《釜石市の宿泊施設受入れ能力とラグビーワールドカップ 2019 開催に伴う交流人口》

- ・ 釜石市内の宿泊施設の定員 約 1,200 人
- ・ ラグビーワールドカップ 2019 大会期間に釜石市に延べ 30 万人が来訪。
- ・ 試合開催時には、1 試合につき約 16,000 人が観戦。

【県担当部局】 政策地域部 政策推進室、市町村課
 県土整備部 県土整備企画室

5 原子力発電所事故に伴う放射線影響対策の充実・強化及び被害に係る十分な賠償の実現

原子力発電所事故に伴う放射線影響対策の経費については、東京電力ホールディングス株式会社への賠償請求を行っているところですが、対策に多額の経費を要していることなどから、引き続き必要な措置を講ずるよう要望します。

《 要 望 事 項 》

1 県及び市町村が放射線影響対策に要した経費の賠償等

原子力発電所事故に伴う放射線影響対策は、本来、国の責任において実施すべきものであることから、県及び市町村の負担とならないよう、全面的な対応を講じることを要望します。

また、県及び市町村が負担した放射線影響対策に要した費用について、十分な賠償を速やかに行うよう、東京電力ホールディングス株式会社を指導するなど、必要な措置を講じることを要望します。

2 被害の実態に即した十分な賠償の実現

民間事業者の出荷制限等による直接的な被害に加え、生産・販売の回復や風評被害による消費者の信頼回復への対応など、事業継続のために生ずる全ての損害について、実態に即した十分な賠償を被害の発生する限り完全かつ速やかに行うよう、東京電力ホールディングス株式会社に対して指導するなど、必要な措置を講じることを要望します。

【現状と課題】

1 県及び市町村が放射線影響対策に要した経費

- 県及び市町村は、東京電力㈱に対し、七次にわたり総額 12,270 百万円の損害賠償請求を行い、支払合意額は 10,642 百万円（86.7%）となっている（平成 28 年 3 月末現在）。
- 国の中間指針は、地方公共団体の損害についても賠償対象になるとしているが、東京電力は賠償範囲を原則として政府指示等に基づいて実施した対策に限定するなど消極的な対応。

《具体例》

- ・ 地方公共団体の判断で実施した放射線影響対策は、必要かつ合理的な範囲を越えているとして基本的に賠償対象外（広報・住民説明対応、風評被害対策、局所的汚染箇所の除染費用、住民要望に対応した持込食材検査費用等について、対策の背景や経緯を斟酌せず一律に賠償対象外として整理）
 - ・ 政府指示等に基づく測定であっても、測定準備や結果公表など地方公共団体に裁量の余地があるとされた工程や、測定のための施設改修費、測定機器の維持管理費等は賠償対象外
 - ・ 空間線量測定や学校給食検査について、安全性が確保されているとして賠償対象期間を限定
- 平成 26 年 1 月 23 日、東京電力との直接交渉のみではこれ以上の交渉の進展が期待できないとの認識に至り、県及び 24 の市町村等が原子力損害賠償紛争解決センター（ADR センター）へ和解仲介の申立てを実施（最終的に 36 市町村等が申立て）。
 - ADR センターの提示した和解案に基づき、平成 27 年 1 月 6 日に県と東京電力が和解契約を締結。

《和解案の概要》

- ・ 放射線影響対策に要した事業費は、ほぼ全てについて相当因果関係がある損害と認定。
- ・ 人件費については、超過勤務手当支給額のうち、原発事故への対応により増加したと認められる部分を損害と認定。

- 平成 28 年 3 月、県及び 32 市町村等が 2 回目となる ADR センターへ和解仲介の申立てを実施。

2 被害の実態に即した十分な賠償の実現

- 東京電力㈱は、損害賠償の実施にあたり国の中間指針に従うとしながらも、賠償対象期間や賠償対象範囲について制限的な運用を行っており、被害者が十分な賠償を受けられない状況。

《制限的な運用の例》

- ・ 平成 24 年 3 月以降における観光業の風評被害について直接請求に応じず、また、教育旅行等の個別事情への対応が不十分
- ・ 中間指針第三次追補において新たに賠償すべき損害と認められた本県農林水産物等の風評被害について、平成 25 年 4 月以降の損害については因果関係を個別に判断するとし、実質的に第三次追補策定以前と同様の制限的な運用を実施
- ・ 被害者が原発事故前を上回る収入を得た時点で風評被害が終結したとみなし、一律に賠償打ち切り
- ・ ブロイラーや養蜂業について、中間指針・第三次追補に対象として明示がないことをもって賠償請求を拒否
- ・ 逸失利益の算定に関して、賠償対象地域以外の地域から仕入れた原料が含まれる場合、その含まれる割合によって賠償額を減額
- ・ しいたけ原木として出荷できなくなった立木に係る財物賠償について、賠償の対象を福島県内に限定
- ・ 出荷制限等により減少した販売額を企業努力により回復させた場合、当該回復分を賠償額から控除
- ・ 津波で流された提出不可能な書類の提出を求められたところ

【県担当部局】総務部 総務室

6 原子力発電所事故に伴う除染・廃棄物処理等への対応

福島第一原子力発電所事故に伴う除染や廃棄物処理に係る費用を支援していただいたところですが、依然として除去土壌や廃棄物の処理等が滞っていることから、国における支援の継続、拡充等を要望します。

《 要 望 事 項 》

1 農林業系副産物の処分

農林業系副産物の処分に複数年を要する市町村があることから、焼却処理や最終処分場での処理等に必要となる費用の支援措置を次年度以降も継続するよう要望します。

2 汚染状況重点調査地域への財政支援

汚染状況重点調査地域においては、道路側溝汚泥等の撤去にあたり、汚染濃度や除染実施区域内外にかかわらず、除染等撤去に要する経費や地域で必要となる一時保管施設の整備等の掛かり増し経費について財政支援を拡充するよう要望します。

3 除去土壌の処理基準の策定

除染により発生した土壌や道路側溝汚泥の処理に向けて、除去土壌の処理基準を早急に示すよう要望します。

4 住民不安の解消

円滑な除染や廃棄物処理、一時保管施設の整備にあたっては周辺住民の理解醸成が不可欠であることから、国が放射性物質への住民不安の解消に万全を期するよう要望します。

【現状と課題】

1 農林業系副産物の処分

- 放射性物質に汚染された農林業系副産物は約 36,000 t 保管されており、市町村等の焼却処理施設において焼却灰濃度を低レベル（8,000Bq/kg 以下）に抑制し、既存の管理型最終処分場に処理することとしているため、処理が長期に及ぶ状況。

また、処理にあたり、一時保管施設の整備、前処理、焼却炉の老朽化、最終処分場の残余容量のひっ迫等が課題。

<農林業系副産物の保管量等（H28.1 末時点）>

	発生量（t）	処理済み量（t）	保管量（t）	進捗率（%）
牧草	20,499.2	13,162.3	7,336.9	64.2
稲わら	573.6	155.5	418.1	27.1
堆肥	7,038.6	2,505.6	4,533.0	35.6
ほだ木	30,646.2	7,369.9	23,276.3	24.0
合計	58,757.5	23,193.3	35,564.3	39.5

2 汚染状況重点調査地域への財政支援

- 汚染状況重点調査地域において、高濃度の汚染土壌や道路側溝汚泥が確認されているものの、空間線量率が基準値より低いいため、一時保管設備の設置等への財政支援を受けられず、現場での処理が滞っている状況。

<道路側溝汚泥保管状況等（H28.3 末時点）>

	要除去箇所数（量）	一時保管箇所数（量）	未処理箇所数（量）	進捗率（%）
一関市	27 箇所	9 箇所	18 箇所	33.3%
奥州市	486 m ³	86 m ³	400 m ³	17.7%

※平成 27 年 8 月 26 日 環境省見解（部単独要望）

- ・空間線量が基準以下であるが、放射性物質濃度が基準を超えているものの取扱いについて、岩手県だけではなく、福島県でも指定市町以外からも強く要望を受けているところ。
- ・どのようなことができるのか財務省ともよく話し合っていく必要があるもの。

3 除去土壌の処理基準の策定

- 放射性物質汚染対処特措法において、除去土壌の処理基準を定めることになっているが、未だ基準が示されておらず、現場での処理が滞っている状況。

<汚染状況重点調査地域における除去土壌の保管量及び箇所数（H28.3 末時点）>

汚染状況重点調査地域	現場保管量（m ³ ）	箇所数
一関市	18,400	213
奥州市	4,634	90
平泉町	1,854	8
計	24,888	311

※平成 27 年 8 月 7 日

- ・除去土壌の処理基準策定にあたり環境省と意見交換。

4 住民不安の解消

- 国が直接地域住民に対し放射線対策に係る説明会を行っておらず、コミュニケーションを図っていないこと、除去土壌や道路側溝汚泥等の処理の見通しが立たないこと、一時保管場所の構造が簡易なものしか補助対象とされていないこと等から、住民不安の解消につながっていない状況。

※平成 27 年 8 月 26 日 環境省見解（部単独要望）

- ・環境省でも様々な説明のためのツールを用意しているが、色々な場で、県や市町村等地元の方が繰り返し説明いただくことも重要。一緒になって取り組んでいきたいところ。

【県担当部局】環境生活部 資源循環推進課、環境保全課

7 原子力発電所事故に伴う農林水産業被害等への対応

これまで、国において、きのこ原木の確保に向けた購入経費補助、放射性物質濃度の調査等への支援や生産再開に取り組む生産者への賠償金の早期支払いへの支援といった措置をしていただいたところです。

これにより、しいたけ生産者の費用負担軽減については改善されたところですが、きのこ原木の高騰が続いている状況であり、また、ホダ場から除去された落葉層の保管・管理や最終的な処理方法の検討などの課題が残されています。

こうした課題に対応するため、きのこ原木の高騰に対する抜本的対策やホダ場から除去された落葉層の保管・管理や最終的な処理方法に対する専門家の派遣等の技術的支援等について要望します。

《 要 望 事 項 》

1 原木しいたけ等の産地再生対策

- (1) 原木しいたけ産地の再生を図るため、不足しているきのこ原木の確保に要する経費について、全面的かつ継続的に支援するとともに、きのこ原木価格の高騰対策を講じるよう要望します。
- (2) 栽培管理ガイドラインに基づき、ホダ場から除去された落葉層の保管・管理や最終的な処理方法の検討について、専門家の派遣等による技術的な支援を実施するよう要望します。
- (3) 経営が悪化している原木しいたけ生産者に対する損害賠償金の早期支払いへの支援や、生産再開に向けて取り組む栽培管理に係る掛かり増し経費について、損害賠償対象とするための支援を継続するよう要望します。
- (4) きのこ原木が不足する中、原木の放射性物質濃度は年々低減してきており、その状況を引き続き把握する必要があることから、平成28年度で終了予定である、森林における除染等実証事業の「モニタリング・データの蓄積等」について、事業期間の延長によるデータ集積を継続するよう要望します。
- (5) 放射性物質対処型森林・林業復興対策実証事業における「ほだ木等原木林

再生のための実証」の対象となる森林について、現状では薪の指標値である40Bq/kgを超える原木林となっていますが、きのこ原木の流通実態を踏まえ、30Bq/kgを超える原木林とするよう要望します。

- (6) 生産者の意欲を高めるため、原木しいたけの安全性に係る正確な情報発信等を行うとともに、産地が行う情報発信やPR活動等の取組について、全面的かつ継続的に支援するよう要望します。

【現状と課題】

- 本県のきのこ原木確保等に向けた国の支援（特用林産施設体制整備復興事業）（単位：千円）

	H26年度（実績）	H27年度（実績）	H28年度（計画）
事業費	270,976	329,089	443,031
国庫補助額	131,286	161,609	221,494

- 放射性物資濃度の調査への国の支援（森林における防除等実証事業）（単位：千円）

	H26年度（実績）	H27年度（実績）	H28年度（計画）
事業費	3,574	3,670	5,270
国庫補助額	3,574	3,670	5,270

1 県の取組

- (1) 出荷自粛及び自主回収を要請された市町村の生産者や風評被害を受けた生産者に、しいたけ栽培等に必要な当座のつなぎ資金としての支援金を融資（原木しいたけ経営緊急支援資金貸付金：H28年度200,610千円、H24年度から実施）。
- (2) 出荷制限等を受けたしいたけや使用自粛となった原木・ホダ木の仮保管や落葉層除去等（ホダ場環境整備）に要する経費を全額県で措置（きのこ原木等処理事業：H28年度56,748千円、H24年度から実施）。
- (3) 不足するきのこ原木を確保するため、関係団体と「しいたけ原木供給連絡会議」を設置し、広域的な需給調整を行うとともに、素材生産業者や他県等に対する原木供給の働きかけを実施。

2 課題

- (1) 県北部に使用可能なきのこ原木林があるものの、伐採・運搬作業の担い手不足や、他県への移出量増加により、原木価格が高騰し、県内の原木が不足。

	震災前（H20-22年平均）	震災後（H26年）	
しいたけ原木価格	181円/本（岩手県内）	262円/本（岩手県内）	339円/本（一関地域）

（きのこ原木の購入経費については、国庫補助事業で対応しているが、原木価格の高騰については国による抜本的な対策が必要）

- (2) 栽培管理ガイドラインに基づき、約33haで落葉層除去を実施し、除去された落葉層はホダ場隣接地等に一時保管されている状況にあることから、その保管・管理や最終的な処理方法の検討について、国からの専門家の派遣等による技術的な支援が必要。
- (3) 出荷制限等により、原木しいたけ生産者の資金繰りが悪化しており、速やかな賠償金の支払いが必要。また、栽培管理の実施にあたっては、一部の取組事項が賠償対象となっていないことから、全ての取組事項を賠償対象とすることが必要（林野庁と東京電力で継続調整中）。
- (4) 指標値以内の原木を生産できるナラ林が大幅に減少したことに伴い、しいたけ原木の価格が高騰

しており、掛かり増し経費として生産者負担が発生。しいたけ生産者は、より安全な原木を求め、県内では30Bq/kgを超えるきのこ原木には買い手がつかない状況（きのこ原木の指標値は、50 Bq/kg）。

(5) 安全確保の取組に対する理解増進が必要。

【県担当部局】農林水産部 林業振興課・森林整備課

水産物の放射性物質検査について、これまで国で全額経費を負担していただいておりますが、未だ出荷制限指示となっている魚種があるため、引き続き国が全面的に経費を負担し、実施していただくよう要望します。

《 要 望 事 項 》

2 水産物被害等への対応

水産物の放射性物質検査について、引き続き、国が全面的に経費を負担し、実施するよう要望します。

【現状と課題】

1 水産物の放射性物質検査の実施

- 水産物の安全性を確認し、生産者や消費者、国際社会に対して正確な情報提供を行うとともに、出荷制限等の解除に向けて、引き続き、放射性物質検査の実施が必要。
- 都道府県の管理水域を越えて移動する回遊性魚種等については、国の主導による広域的な検査体制の維持が必要。

【県担当部局】農林水産部 水産振興課

これまで、国においては、消費者に対して放射性物質に対する正確な情報提供や、被災地及び周辺地域で生産された農林水産物・食品の積極的な消費により、復興を応援する取組である「食べて応援しよう！」を推進していただいたところです。

これにより、岩手県・宮城県・福島県で生産された食品の購入をためらう人の割合が減少傾向にありますが、依然として1割以上の方が、放射性物質による不安を払拭できず、購入をためらう状況にあります。

こうした課題に対応するため、農林水産物の安全性に係る正確な情報提供や周知活動が継続して行われるとともに、地方公共団体や生産者団体等が取り組む風評被害対策に要する経費について全面的かつ継続的に支援を行うよう要望します。

《 要 望 事 項 》

3 風評被害の防止

- (1) 放射性物質の影響への不安により、岩手県産の食品の購入をためらう消費者が見られることから、農林水産物の安全性に係る正確な情報提供やPR活動等を継続して行うよう要望します。
- (2) 県、市町村、生産者団体等が取り組む風評被害対策に要する経費について、全面的かつ継続的に支援するよう要望します。

【現状と課題】

- (1) 消費者庁による「風評被害に関する消費者意識の実態調査（第7回）」では、放射性物質による影響への不安から、食品購入をためらう産地を「岩手県・宮城県・福島県」と回答した人が平成28年2月時点で、未だに10.1%も存在しており、風評被害は依然として払拭されていない状況。農林水産物の安全性を消費者等に正しく理解していただくため、継続して的確な情報の発信に取り組むことが必要。

《岩手県・宮城県・福島県で生産された食品の購入をためらう消費者の割合》

調査時期	25年2月	25年8月	26年2月	26年8月	27年2月	27年8月	28年2月
割合(%)	14.9	13.0	11.5	12.9	12.6	11.7	10.1

※出典：消費者庁「風評被害に関する消費者意識の実態調査」

- (2) 風評被害払拭のため、東日本大震災復興交付金や消費者庁の地方消費者行政推進交付金等を活用し、失われた販路の回復と拡大などに向けた取組を実施。原発事故の影響が長期化する中、県、市町村、生産者団体等においては、風評被害対策の継続的な取組が必要であり、今後も財政面での支援が必要。

《消費者行政推進交付金を活用した風評被害対策の取組状況》

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
事業実施主体数	58	30	24
助成金額合計(千円)	21,472	22,078	22,258

※上記交付金を活用した県補助事業による市町村・生産者団体の取組。

【県担当部局】農林水産部 流通課

これまで、国においては、諸外国に対し、国内の農林水産物や食品の安全性に関する情報を発信していただいたところです。

しかし、本県産の水産物等については、明確な科学的根拠が示されないまま、一部の国から輸入の禁止措置や規制強化措置が講じられています。

こうした課題に対応するため、規制の早期解除について働きかけるよう要望します。

《 要 望 事 項 》

4 諸外国における農林水産物等の輸入規制への対応

農林水産物や食品の安全性に関する的確な情報を諸外国に発信し、信頼性の回復を図るとともに、輸入規制を強化している韓国や台湾等の諸外国の政府に対し、規制を早期に解除することを強力に働きかけるよう要望します。

【現状と課題】

- 岩手県産の水産物等については、明確な科学的根拠が示されないまま、韓国政府等による輸入禁止措置や、台湾政府等による輸入規制強化措置が講じられていることは、東日本大震災津波からの復興に取り組む本県水産業に影響を及ぼすことから、諸外国に対して、放射性物質検査に基づく安全性確保の取組等を的確に情報発信し、信頼性の回復を図ることが必要。
- また、韓国、台湾及び中国等の政府は、日本産の農林水産物等を輸入する際の規制として、日本国内の輸出事業者に対して、政府作成の放射性物質検査証明書等の添付を求めているが、事業者の手間やコストが高むことから、その負担軽減を図るため、関係諸外国の政府に対して、規制が早期に解除されるよう強力な働きかけが必要。

《岩手県に係る各国・地域の輸入規制状況（平成28年5月13日現在）》

輸入規制状況	該当国・地域数	主要国・地域名（品目名）
輸入停止	3ヶ国	韓国（水産物等）、米国（きのこ類等）等
放射性物質検査証明書	12ヶ国・1地域	中国（水産物等）、台湾（水産物）等
産地証明書	11ヶ国・1地域	シンガポール（水産物等）、台湾（すべての食品）等

※出典：農林水産省

【県担当部局】農林水産部 流通課

8 直轄事業の着実な推進

平成 28 年度予算においては、三陸沿岸道路等の復興道路、復興支援道路や港湾の復旧・整備に手厚く予算措置されるなど、被災地の復興が更に加速するものと期待しています。

引き続き、被災地の復興を牽引する復興道路等や港湾の復旧・復興事業について、強力に整備促進を図るよう、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 「復興道路等」の早期完成

三陸沿岸道路、東北横断自動車道釜石秋田線、宮古盛岡横断道路の復興道路等について、国の『復興・創生期間』における東日本大震災からの復興の基本方針に沿って着実に整備を進め、早期に全線完成するよう要望します。

2 津波対策のための防災施設等の早期復旧・整備

釜石港湾口防波堤及び宮古港竜神崎防波堤について、早期の復旧・整備に向け、確実に事業を推進するよう要望します。

また、久慈港湾口防波堤についても、できる限り事業期間を前倒しのうえ、早期完成を図るよう要望します。

3 必要な予算の確保

被災地の早期復旧・復興に遅れが生じないように、また、資材価格や人件費の上昇による事業費の増額にも十分対応できる予算を確実に確保し、整備促進を図るよう要望します。

【現状と課題】

1 「復興道路等」の早期完成

○ 岩手県内の復興道路等の開通予定

開通予定	路 線	区 間	延長
平成 29 年度	三陸沿岸道路 (山田宮古道路)	山田 IC～宮古南 IC	14.0km
	三陸沿岸道路 (宮古田老道路)	(仮称)田老第 2 IC～(仮称)田老北 IC	4.0km
	三陸沿岸道路 (田老岩泉道路)	(仮称)田老北 IC～岩泉龍泉洞 IC	6.0km
平成 30 年度	三陸沿岸道路 (唐桑高田道路)	(仮称)唐桑北 IC～陸前高田 IC (うち岩手県内)	10.0km (8.0km)
	三陸沿岸道路 (吉浜釜石道路)	吉浜 IC～(仮称)釜石 JCT	14.0km
	三陸沿岸道路 (釜石山田道路)	(仮称)釜石 JCT～釜石両石 IC	5.6km
	三陸沿岸道路 (釜石山田道路)	(仮称)大槌 IC～山田南 IC	8.0km
	三陸沿岸道路 (久慈北道路)	久慈北 IC～(仮称)侍浜 IC	7.4km
	東北横断自動車道釜石秋田線 (釜石道路)	(仮称)釜石 JCT～(仮称)釜石西 IC	6.0km
	東北横断自動車道釜石秋田線 (遠野道路)	遠野住田 IC～遠野 IC	11.0km
	宮古盛岡横断道路 (宮古西道路) 【岩手県施行】	(仮称)松山 IC～(仮称)根市 IC	3.3km
平成 31 年度	宮古盛岡横断道路 (宮古箱石道路)	宮古市下川井地区	2.0km
	宮古盛岡横断道路 (都南川目道路)	田の沢 IC～手代森 IC	3.4km
平成 32 年度	三陸沿岸道路 (宮古田老道路)	宮古中央 IC～(仮称)田老第 2 IC	17.0km
	宮古盛岡横断道路 (宮古箱石道路)	宮古市藤原～(仮称)松山 IC	4.0km
	宮古盛岡横断道路 (区界道路)	宮古市区界～盛岡市築川	8.0km
		計	121.7km

○ 岩手県内の復興道路等の開通見通し未発表区間

開通予定	路 線	区 間	延長
未発表	三陸沿岸道路 (洋野階上道路)	(仮称)侍浜 IC～階上 IC (うち岩手県内)	23.0km (20.0km)
	三陸沿岸道路 (野田久慈道路)	普代～久慈 IC	25.0km
	三陸沿岸道路 (尾肝要普代道路)	(仮称)田野畑北 IC～普代	8.0km
	三陸沿岸道路 (田野畑道路)	(仮称)田野畑南～尾肝要	6.0km
	三陸沿岸道路 (釜石山田道路)	釜石北 IC～(仮称)大槌 IC	4.8km
		小計	63.8km
	宮古盛岡横断道路 (宮古箱石道路)	宮古市暮目～腹帯地区	7.0km
	宮古盛岡横断道路 (宮古箱石道路)	宮古市川井～箱石地区	7.0km
	宮古盛岡横断道路 (平津戸松草道路)	宮古市平津戸・岩井～松草	7.0km
		小計	21.0km
		計	84.8km

○ 三陸沿岸道路の北部など開通見通しの未発表区間が多く残っていることから、「復興・創生期間における東日本大震災からの基本方針」に沿って着実に整備を進め、被災地の復興を牽引する復興道路等の早期の全線完成を図る必要。

2 津波対策のための防災施設等の早期復旧・整備

- 県内の湾口防波堤等の復旧・整備予定

復旧・整備予定	施設名
平成 28 年度	大船渡港湾口防波堤
平成 29 年度	釜石港湾口防波堤
	宮古港竜神崎防波堤
平成 40 年度	久慈港湾口防波堤

3 必要な予算の確保

- 国が復興のリーディングプロジェクトとして位置付けている復興道路や復興支援道路の整備、本県の地域経済を支える港湾の復旧・整備に伴い、復興道路等と港湾を活用した新たな企業立地等の動きがあり、被災地の地域経済活動に再生の兆し。
- 久慈港では、再生可能エネルギー関連資材の新規取扱いの動きがあるほか、造船メーカーが事業を拡大し雇用が増大。
- 宮古港では、復興道路等の完成によるアクセス向上を見込み、平成 30 年 6 月の宮古～室蘭間のフェリー定期航路開設が決定。
- 釜石市では、釜石港と復興道路等を活用した流通面の優位性から、大手物流会社による営業所開所など、物流の拠点として企業立地等に活発な動きがあり、地域の雇用が増大する見込。
- 大船渡港の工業用地に複数企業が立地意向を示しているところ。
- ラグビーワールドカップの開催や、国内クルーズ船の寄港増加、外航クルーズ船社からの寄港希望があることなどから、大型クルーズ船の安全な入出港を行うための調査事業に着手予定。
- これらの動きを確実なものとし、被災地の産業・なりわいを再生させるため、復興道路等や港湾の復旧・整備に必要な予算について確実に確保し、一層の整備促進を図ることが必要。
- また、被災地では資材価格や人件費が上昇しており、これらに対応するための予算の確保が必要。

〈復旧・復興に係る本県の主な直轄事業の状況（災害復旧を除く）〉

（単位：百万円）

	H25 当初		H26 当初		H27 当初		H28 当初	
	事業費	直轄負担金	事業費	直轄負担金	事業費	直轄負担金	事業費	直轄負担金
道路(復興道路等)	96,175	18,358	100,824	20,066	133,084	27,500	151,850	33,845
港湾(湾口防波堤等)	7,128	2,526	7,244	2,647	7,244	2,686	5,976	2,252

【県担当部局】 県土整備部 県土整備企画室、道路建設課、港湾課

9 社会資本整備総合交付金（復興）の復興の進度に応じた確実な予算措置

《 要望事項 》

1 復興の進度に応じた確実な予算措置

防潮堤、水門等の海岸保全施設や港湾施設、復興まちづくりに伴う土砂災害対策施設、災害に強く信頼性の高い交通ネットワークの構築に向けた道路整備等について、復興事業が完了するまでの間、確実に予算措置するよう要望します。

【現状と課題】

1 復興の進度に応じた確実な予算措置

- 社会資本整備総合交付金（復興）は本県の社会資本の復興に欠かすことのできない事業であり、平成 29 年度以降も多額の事業費が必要。
- 市町村のまちづくりと一体となった防潮堤、水門等の海岸保全施設や土砂災害対策施設、被災地の復興を牽引する道路等を整備しており、復興まちづくりの前提となる基幹的事业等を着実に進め、被災地の早期復旧・復興を図るためには、復興の進度に応じた確実な予算措置が必要。

《 本県の社会資本整備総合交付金（復興）の事業費（県事業）の見通し（平成 28 年 5 月試算） 》

	H23～H27 実績見込	H28 当初	H29 以降見込
事業費	1,293 億円	595 億円	約 1,000 億円
国費	677 億円	303 億円	約 500 億円
地方負担	616 億円	292 億円	約 500 億円

【県担当部局】 県土整備部 県土整備企画室

10 被災地の繰越手続の簡素化及び復旧・復興の進度に応じた予算配分

これまで国においては、被災地の繰越手続の簡素化について実施いただいていたところですが、本県では依然としてマンパワー不足や資材不足等の課題があることから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 被災地の繰越手続の簡素化

被災地の復旧・復興事業を着実に進めるため、被災地における事故繰越手続について、簡素化の措置を継続するよう要望します。

2 被災地の復旧・復興の進度に応じた予算配分

やむを得ず執行不可能となった予算については、後年度において国が再度予算を計上するとともに、被災地の復旧・復興の進度に応じた予算配分措置を講じるよう要望します。

【現状と課題】

1 被災地の繰越手続の簡素化

- 被災地では、平成 27 年度予算を翌年度に繰り越して事業執行しているが、マンパワー不足や資材不足等の課題が複合的に発生し、平成 28 年度内に完了しない可能性。
- その場合、事故繰越に要する手続は膨大な事務量となることから、平成 27 年度予算も平成 23 年度補正予算等と同様に簡素化が必要。

《参考》「事故繰越手続等々の簡素化」の主な内容（第4回復興推進会議（平成24年11月）合意）

- ①繰越理由書 ⇒ 必要最低限の事項を記載する簡易な様式を作成し1枚で全てを完結
- ②添付資料 ⇒ 事業概要・工程表・図面・契約書類等の添付を全廃
- ③ヒアリング ⇒ 財務局ヒアリングを全廃

《参考》本県の繰越状況（県土整備部・農林水産部分、国費ベース）

	県土整備部	農林水産部 (水産庁所管分(公共))	合 計
H26⇒H28 事故繰越	8,476 百万円	31,525 百万円	40,001 百万円
H27⇒H28 明許繰越	39,264 百万円	50,973 百万円	90,237 百万円

2 被災地の復旧・復興の進度に応じた予算配分

- 関係機関等との協議に時間を要するなど、当初予定していた工程から大幅な遅れが生じ、今年度内においても予算を執行できない場合は、不用残額にせざるを得ない状況。

《参考》本県の復旧・復興予算に係る不用額の状況（県土整備部・農林水産部分、国費ベース）

	県土整備部	農林水産部 (水産庁所管分(公共))	合 計
H27 不用額	1,449 百万円	17,590 百万円	19,039 百万円

【県担当部局】 県土整備部 県土整備企画室

農林水産部 水産振興課、漁港漁村課

11 高田松原津波復興祈念公園への支援と国営追悼・祈念施設（仮称）及び重点道の駅「高田松原」の早期整備等

東日本大震災津波による犠牲者への追悼と鎮魂や、日本の再生に向けた復興への強い意志を国内外に向けて明確に示すこと等を目的とした、復興の象徴となる高田松原津波復興祈念公園等の整備に向けて、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 高田松原津波復興祈念公園の全区域の事業採択と必要な予算の確保及び技術的支援

「高田松原津波復興祈念公園基本計画」に基づいた復興祈念公園の実現に向けて、公園の全区域を復興交付金等で早期に事業採択するとともに、整備が完了するまでの間、必要な予算の確保及び技術的支援をするよう要望します。

2 国営追悼・祈念施設（仮称）の早期整備

復興の象徴となる国営追悼・祈念施設（仮称）を高田松原津波復興祈念公園の核としてふさわしい内容で早期に整備するよう要望します。

3 一般国道 45 号重点道の駅「高田松原」の機能充実のための総合的な支援と早期再整備

復興祈念公園内に整備する重点道の駅「高田松原」は、三陸地域へのゲートウェイとしての機能や震災伝承機能などを有する重要な施設であることから、地方創生の核として、国営追悼・祈念施設（仮称）と連携し、ラグビーワールドカップ 2019 開催に向けて早期に整備するよう要望します。

【現状と課題】

国では、県が整備する復興祈念公園全体と、復興祈念公園内に設置する国営追悼・祈念施設（仮称）の基本計画を平成 27 年 8 月に公表。有識者委員会において、現在基本設計の検討を進めているところ。

《 高田松原津波復興祈念公園基本計画に掲げる 8 つの基本方針 》

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ①失われたすべての生命（いのち）の追悼・鎮魂 | ②東日本大震災の被災の実情と教訓の伝承 |
| ③復興への強い意志と力の発信 | ④三陸地域に育まれた津波防災文化の継承 |
| ⑤公園利用者や市街地の安全の確保 | ⑥歴史的風土と自然環境の再生 |
| ⑦市街地の再生と連携したまちの賑わいの創出 | ⑧多様な主体の参加・協働と交流 |

1 高田松原津波復興祈念公園整備事業の未採択区域の早期事業採択等

- 県では、公園整備に係る事業費の確保が最大の課題。
- 公園整備に当たっては、平成26年度に一部区域について復興交付金事業として採択されたが、「高田松原津波復興祈念公園基本計画」に基づいた復興祈念公園の実現に向けて、公園の全区域を復興交付金等による早期の事業採択が必要。

区 域	面積	主体	財源	備考
国営追悼・祈念施設	10ha	国	—	H28 実施設計
道の駅	4ha	国	—	H28 実施設計見込
国道45号南側（気仙川左岸）	27ha	県	復興交	H28 実施設計
国道45号北側（川原川～シボルロード）	4ha	県	復興交	H28 実施設計
国道45号北側（運動エリア）	18ha	市	未定	市災害復旧で調整中
国道45号北側（定住促進住宅周辺）	3ha	県	未定	
気仙中周辺（気仙川右岸）	7ha	県	未定	
	73ha			

2 国営追悼・祈念施設（仮称）の早期整備

- 国は、平成28年度予算に「国営追悼・祈念施設整備事業（岩手県陸前高田市高田松原地区）（263百万円）」を計上し、実施設計、地質調査及び測量を実施するところであり、早期整備に向け確実な事業推進が必要。

3 一般国道45号重点道の駅「高田松原」の機能充実のための総合的な支援と早期再整備

- 観光の核となる観光施設等の被災・休止により、陸前高田市及び岩手県三陸沿岸地域の観光入込客数が減少。
- 高田松原津波復興祈念公園の基本計画において「当公園では、再整備される道の駅とも連携し、津波防災教育や観光の拠点なる場を確保します。」としており、一般国道45号道の駅「高田松原」は、震災伝承機能と三陸沿岸へのゲートウェイとしての機能を有する重要な施設。

《観光入込客数の推移》

	陸前高田市	岩手県三陸沿岸地域 (洋野町～陸前高田市)
H22	約95万人	約683万人
H26	約46万人	約641万人

- これら2つの機能の充実を図るため国・県・市の連携を深めるとともに、国の総合的な支援が必要。併せて、地域振興を図るため国営追悼・祈念施設（仮称）と連携し、ラグビーワールドカップ2019開催に向けた早期整備が必要。

【県担当部局】 県土整備部 都市計画課
復興局 まちづくり再生課

12 津波対策施設に係る維持管理費等に対する財政支援

《 要 望 事 項 》

1 津波対策施設に係る維持管理費等に対する財政支援の確立

東日本大震災津波において、水門等の閉鎖作業にあたった消防団員が多数犠牲となったことから、自動閉鎖システムの整備等を推進する必要があります。

自動閉鎖システムの整備等に伴い、毎年、地方公共団体が負担する維持管理費、修繕費、更新費が発生することから、恒久的な財政措置を講じるよう要望します。

【現状と課題】

- 東日本大震災津波において水門等の閉鎖作業にあたった消防団員が多数犠牲となったことから、操作員の安全確保を図るため、自動閉鎖システムの整備等を推進する必要。
- 水門等の統廃合や常時閉鎖化等を行ってもなお、自動閉鎖システムの整備等が必要な水門等が約 220 基に増加する見込。

《震災前後の操作・運用比較》

(県管理海岸(国土交通省所管、農林水産省所管)、市管理海岸(農林水産省所管)の合計)

(単位: 基)

震災前		⇒	削減			⇒	震災後 H27.10月現在		
施設数	遠隔		削減後 ①	新設 ^{※1)} ②	施設数(①+②)		常時閉鎖等 ^{※2)}	遠隔 ^{※3)}	
773 ¹⁾	35		約380 ¹⁾	約400	約120	約520	約300	約220	

※1) 新設: 震災前の無堤区間の整備等、防潮堤延長の増に伴い新設となるもの

※2) 常時閉鎖等: フラップゲート化、常時閉鎖運用等

※3) 既存システム(12)、自動閉鎖システム(217)

- 一方、これらを確実に稼働させるためには、施設整備後も電気料や点検費用、施設・設備の修繕費・更新費などが必要となるが、現行の財政支援は一部の費用しか補助・交付の対象とされていない状況。
- 国では、平成 27 年 6 月に策定した「国土強靱化アクションプラン 2015」において、操作従事者の安全確保を最優先とする水門等の効果的な管理運用を推進することとしているところ。
- 電気料金の算定は主に基本料金と電力量料金によって算定されるが、水門等においては、津波襲来時の操作や年に数回の点検時の最大需要電力に基づき基本料金が算定されるため、使用頻度に応じた基本料金の導入が必要。
- 全国に先駆けて整備している自動閉鎖システムに関して、水門等の維持費は約 5 億円/年、更新費は約 10 億円/年を要する見込。

《自動閉鎖システムの整備等に必要となる主な費用と現行の財政支援状況》

区分	主 な 内 容	現行の財政支援状況 (補助率等)
整備費	<ul style="list-style-type: none"> ・ 通信施設 (遠隔監視制御装置、情報処理装置、衛星通信装置、光通信装置 等) ・ 電源設備 (配電・分電装置、非常用発電機 等) ・ 制御所建物 (消防署・屯所 等) 	1 / 2 (※1)
修繕費・更新費		1 / 2 (※2)
維持管理費	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電気料 ・ 点検費用 (保守定期点検、精密点検 等) 	—

※1 社会資本整備総合交付金 (復興)、農山漁村地域整備交付金

※2 国土交通省所管：特定構造物改築事業、海岸堤防等老朽化対策緊急事業、津波・高潮危機管理対策緊急事業
農林水産省所管：農山漁村地域整備交付金 (海岸保全施設整備)

【県担当部局】 県土整備部 河川課

農林水産部 農村建設課、漁港漁村課

13 JR山田線（宮古・釜石間）の早期復旧への支援

平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波により甚大な被害を受けた、JR山田線の宮古・釜石間は、復旧後における三陸鉄道による運営が決定し、現在復旧工事が進められているところです。

JR山田線は、通学、通院など、三陸沿岸住民の生活の足であるとともに、観光など三陸沿岸地域の振興に不可欠な路線であることから、各沿線市町は、復興計画において、JR山田線を重要な復興の社会基盤と位置付けています。

つきましては、東日本大震災津波から復興しようと懸命に努力している被災地のためにも、JR山田線の全線復旧が早期に図られるよう、特段のご配慮をお願いします。

《 要 望 事 項 》

1 JR山田線復旧に伴う費用負担の取扱

東日本旅客鉄道株式会社がJR山田線の復旧を行うに際し、県及び市町によるまちづくりに伴い、原状復旧と比較して増加する費用について、地域の復興に対する支援という観点から、沿線自治体の実質的な負担がないよう、財政的支援を講じることを要望します。

2 JR山田線の強化に係る財政支援

三陸鉄道の持続的な運営を図るため、復旧工事と併せて実施する予定のJR山田線の鉄道施設の強化について、財政的支援を講じるよう要望します。

3 東日本旅客鉄道株式会社への復旧に関する指導・助言等の措置

JR山田線に関して、東日本旅客鉄道株式会社が復旧工事を進めるにあたり、適切な指導助言等の措置を講じるよう要望します。

【現状と課題】

- 東日本大震災津波により、JR山田線（宮古～釜石間 55.4 km）は、駅舎、線路、橋梁の流失・損壊など、甚大な被害。

路線名	駅舎流失	浸水区間	線路流失	橋梁流失	盛土流出
山田線	4 駅／13 駅 (30.8%)	21.7 km／55.4 km (39.2%)	6.3 km／55.4 km (11.4%)	6 箇所	10 箇所

- JR山田線は、復旧後における三陸鉄道による運営が決定し、平成 27 年 3 月に復旧工事に着工。
- 東日本旅客鉄道株式会社は、原状復旧費用については自社負担の意向を示しているものの、被災地のまちづくり等に伴い、掛かり増しとなる費用については、自社負担はせず、国等の支援によることを求めているもの。
- 東日本旅客鉄道株式会社は、JR山田線の復旧に際して、レール、マクラギ、土工、トンネル、橋りょう等の一部の強化を行うこととしているが、三陸鉄道においては、移管後の持続的運営を図るため、それ以上に必要とする鉄道施設の強化を実施することとしているもの。

【県担当部局】 政策地域部 地域振興室

14 警察施設の復旧及び交通安全施設等の 整備事業に係る財政支援

《 要 望 事 項 》

1 警察施設復旧に係る財政支援

被災した警察施設については、これまで警察庁における都道府県警察施設災害復旧費補助金制度に基づく措置や補助単価の改定による財政支援を得て復旧を進めてきたところです。しかしながら、被災地における工事費の高騰は著しく、実勢工事単価が補助単価を大きく上回っており、多額の県費負担が見込まれることから、財政支援の拡充により県の負担を軽減するよう要望します。

2 交通安全施設等の整備事業に係る支援の継続及び拡充

復興のために必要となる交通安全施設等の整備は、復興道路等の整備事業と一体不可分な事業であり、これまで警察庁における災害復興補助金要綱に基づく措置や補助単価の改定による財政支援を得て、事業を推進してきたところです。しかしながら、被災地においては、依然として実勢工事単価が補助単価を大きく上回っており、多額の県費負担が見込まれることから、財政支援の継続と拡充により県の負担を軽減するよう要望します。

【現状と課題】

1-1 都道府県警察施設災害復旧費補助金による復旧実績及び今後、復旧を要する施設(見込)

年度	施設数	施設名
平成26年度	2	平田駐在所、大船渡署長公舎
平成27年度	7	気仙駐在所、綾里駐在所、磯鶏駐在所、港町交番 高田幹部交番、高田職員宿舎、小本駐在所
平成28年度	7	(施工中) 大槌交番、田老駐在所 (未着工) 山田交番、山田職員宿舎、鶴住居駐在所、吉里吉里駐在所、 大槌職員宿舎
平成30年度	5	(未着工) 釜石警察署、沿岸運転免許センター、交通機動隊沿岸分駐 隊、大船渡駅前交番、赤崎駐在所

1-2 防災拠点である警察施設復旧への支援

- 東日本大震災津波では、警察署、交番、駐在所など多くの警察施設が被災し、復旧工事にあたっては、都道府県警察施設災害復旧費補助金制度を活用。
- 国庫補助金は補助対象額の2/3とされ、残りの県費負担分は震災特別交付税を充当することにより、実質的な県費負担は生じない制度となっている。
しかし、補助単価が実勢工事単価と乖離している上、被災地における工事費の高騰が続いていることから、実際には補助対象工事において、約1億8千万円(試算額)の県費負担が生じる見込み。
- 住民の安全安心を守るためには警察施設の確実な復旧が必要であることから、補助単価の見直し等による補助対象額を増額し、県費負担の軽減を図ることが必要。

2-1 復興道路等の開通予定

区 間	改 良 工 事 開 通 見 通 し			
	H29年度	H30年度	H31年度	H32年度
三陸沿岸 道路	洋野～陸前高田 約213km	→		
	開通見通し区間 24.0km	田老北IC～岩泉龍泉洞IC 田老第2IC～田老北IC 山田IC～宮古南IC	待浜IC～久慈北IC 大槌IC～山田南IC 釜石JCT～岡石IC 吉浜IC～釜石JCT 県境～陸前高田IC 45.0km	宮古中央IC～田老第2IC 17.0km
東北横断 自動車道 釜石秋田線	花巻～釜石 約80km	→		
	開通見通し区間		釜石JCT～釜石西IC 遠野住田IC～遠野IC 17.0km	
宮古盛岡 横断道路	盛岡～宮古 約100km	→		
	開通見通し区間		下川井地区 田の沢IC～手代森IC 5.4km	藤原～松山IC 4.0km

2-2 復興道路等の交通安全施設整備に要する経費(見込)

区間	(単位:千円)			
	三陸沿岸道路	東北横断自動車道 釜石秋田線	宮古盛岡横断道路	合 計
平成29年度～	1,003,057	116,601	200,507	1,320,165

2-3 必要な予算の確保と全面的な財政支援

- 被災地域における土地区画整理事業等、復興交付金基幹事業に併せて整備する交通安全施設等については、県費負担の必要がない効果促進事業を活用。
- 復興道路等の整備に伴う交通安全施設等整備については、警察庁の「復興に必要となる交通安全施設等整備事業に係る国庫補助金取扱要綱」に定める国庫補助事業として、補助金の県費負担分を震災特別交付税を充当することにより、一部を除き県費負担を生じない制度となっている。
しかし、補助単価が実勢工事単価と乖離していることなどから、実際には約1億6千万円(試算額)の県費負担が生じる見込み。
- 復興道路等の安全確保のためには適時適切な整備が必要であることから、これまでと同様の財政支援を継続するとともに、補助単価の見直し等による補助対象額を増加し、県費負担の軽減を図ることが必要。

【県担当部局】警察本部 会計課・交通規制課

15 広域防災拠点整備に対する財政支援

《 要 望 事 項 》

1 広域防災拠点整備に対する財政支援

本県では、東日本大震災津波の教訓を踏まえて、大規模災害時に支援拠点となる広域防災拠点の整備を進めていますが、既存施設の活用に加え、新たな施設等の整備も必要となることから、財政支援を講じるよう要望します。

【現状と課題】

- 本県では、平成 25 年 2 月に、広域防災拠点の整備に関する考え方を定めた「岩手県広域防災拠点整備構想」を策定し、広域防災拠点を、本県が被災した場合のみならず、隣接県等が被災地となった場合においても、自衛隊等の活動拠点や物資供給等の拠点として機能するものと定義。
- 平成 26 年 3 月には、広域防災拠点の配置箇所を定めた「岩手県広域防災拠点配置計画」を策定。既存施設の活用を前提としているが、備蓄倉庫や通信設備など新たな施設や設備が必要であり、多額の事業費が見込まれること。
- 災害応急対策に必要な機能を集約した新たな防災拠点施設の整備について、中長期的な課題に位置付けたうえで、引き続き検討を進めていくこととしていることから、新たな防災拠点施設の整備に対する財政支援措置の創設が必要。

《参考 1：既存施設の活用を前提とした本県の広域防災拠点整備までのスケジュール》

年 度	実 施 項 目
平成 25 年度～26 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広域防災拠点配置計画の策定 ・ 災害備蓄指針の策定 ・ 広域防災拠点運用マニュアルの作成等
平成 26 年度～30 年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広域防災拠点の整備（既存施設を活用する場合、運用に支障がでないよう、衛星携帯電話を配備するほか、備蓄指針に基づく物資を備蓄）

《参考 2：広域防災拠点整備に要する事業費見込み》

- ① 既存施設を活用して整備する場合の事業費見込み（概算）
備蓄倉庫や通信設備等の整備には、1 箇所あたり 5～7 千万円程度を見込んでおり、県内 4 箇所とした場合、全体事業費として 2～3 億円程度と試算。
- ② 新たな防災拠点を整備する場合の事業費見込み（概算）
他県の例では、施設建設等の事業費として、概ね 50～60 億円程度を要しているところ。

【県担当部局】総務部 総合防災室

16 被災者の生活再建に対する支援

東日本大震災津波による被災者への支援については、これまで、国において災害救助法に基づく救助範囲を拡充するとともに、震災復興特別交付税により措置していただいているところです。

これにより、応急仮設住宅の補修費についても国費の対象とされたほか、当該交付税を原資とし、県及び市町村が独自に住宅再建支援施策等を講ずるなどの被災者支援が行われているところですが、応急仮設住宅の供与期間の長期化や建築資材の高騰等に伴い、新たな課題も生じているところです。

このような新たな課題に対応するため、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 災害救助法に基づく救助の適用範囲の拡充

応急仮設住宅の集約等により被災者が他の応急仮設住宅へ転居せざるを得ない場合の移転費用について、災害救助費の対象とするよう要望します。

2 被災者生活再建支援制度の拡充

被災者の住宅再建が十分に図られるよう、被災者生活再建支援金を工事単価の上昇に対応して増額するとともに、半壊世帯も対象とするなど支援範囲を拡大するほか、震災復興特別交付税などの地方財政措置による支援を拡大するよう要望します。

3 個人の二重債務解消に向けた支援

被災前の住宅ローン等が生活再建の支障とならないよう、法整備を含む新たな債務整理のための仕組みの構築などについて、国による積極的な対応を要望します。

【現状と課題】

1 応急仮設住宅間の転居費用に対する支援

- 応急仮設住宅の団地の集約や、民間賃貸住宅の貸主の事情等により被災者がやむを得ず他の応急仮設住宅へ転居する場合の移転費用については、自治体が負担している状況（今年度、県では当初予算で7,750万円を計上。）。
- 応急仮設住宅の供与期間については、災害公営住宅や区画整理事業等の面整備の状況を勘案し、1年ごとに国と延長協議を行っている。現在の供与期間は、次のとおり。
 - ・ 一律7年間（平成30年3～8月）に延長～山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市（5市町）
 - ・ 特定の事情のある方に限定し7年間（平成30年3月31日まで）に延長（特定延長）～宮古市（1市）

2 被災者生活再建支援制度の拡充

- 現行制度では、全壊の場合、被災者生活再建支援金の支援額の上限は300万円であるが、住宅建設費が上昇していることもあり、住宅再建には不十分。

〔例：1,000万円の住宅を建てる場合〕

- ① 住宅取得に係る経費 1,000万円
- ② 支援制度による補助等 515万3,000円
 （内訳）利子補給、新築補助（バリアフリー・県産材）115万3,000円
 被災者生活再建支援金 300万円、被災者住宅再建支援事業 100万円
 ①－②＝484万7,000円（被災者自己負担額）

- 支給対象は、全壊（半壊で解体する場合を含む。）又は大規模半壊した世帯であるが、半壊世帯においても住宅再建のために多額の資金が必要。

- 工事単価（請負金額）の平均 （単位：万円／坪）

	震災前	震災後							
		H25.2頃 (第1回)	H25.10頃 (第2回)	H26.7頃 (第3回)	H27.7頃 (第4回)				
3県合計	49.1万円	⇒ (UP)	52.7万円	⇒ (UP)	54.7万円	⇒ (UP)	55.9万円	⇒ (UP)	57.3万円
岩手県	100 48.5万円	⇒ (UP)	106.6 51.7万円	⇒ (UP)	109.1 52.9万円	⇒ (UP)	113.2 54.9万円	⇒ (UP)	116.9 <u>56.7万円</u>
宮城県	100 47.5万円	⇒ (UP)	111.6 53.0万円	⇒ (UP)	120.8 57.4万円	⇒ (DW)	115.4 54.8万円	⇒ (UP)	118.5 56.3万円
福島県	100 51.2万円	⇒ (UP)	106.4 54.5万円	⇒ (UP)	112.7 57.7万円	⇒ (UP)	116.0 59.4万円	⇒	116.0 59.4万円

※ 出典：「被災三県の住宅復興に関する実態把握調査（第4回調査）～木造住宅生産体制に関するアンケート～」（一般社団法人岩手県建築士事務所協会）

※ 工事単価は、元請の木造住宅新築工事のもの（建替えを含む。）。

3 個人の二重債務解消に向けた支援

- 応急仮設住宅から恒久住宅への移行が本格化する中で、個人の住宅ローン等に関する二重債務問題が被災者の生活再建に大きな障害。
- 住宅金融支援機構が住宅ローンの返済を猶予している5年間の終了し、返済の再開により生活再建が困難になるケースが想定される。
- 「個人債務者の私的整理に関するガイドライン」による債務整理は、平成28年4月1日現在で5,669件の相談に対し、成立件数は1,347件（うち岩手県356件）、23.8%と低調。
- 東北財務局の調査において、当該制度の認知度が低いとの結果が出ているが、そもそも債権者である金融機関の全ての合意が必要であり、私的整理という仕組みに限界。
- 法整備を求める請願が県議会に提出され、採択されているところ。

【県担当部局】復興局 生活再建課

《 要 望 事 項 》

4 消費税率の引き上げに伴う被災地に配慮した対策の実施

平成31年10月に予定されている消費税率の引き上げによって被災地の経済の落ち込みや復興への影響を招くことがないように、引き上げ前から国において被災地に配慮した実効性のある対策を十分講じるよう要望します。

【現状と課題】

- 消費税率については、平成26年4月1日より8%となり、さらに、平成31年10月1日より10%に引上げが予定されているところ。
- 消費税率引上げに伴う被災者支援策として、平成25年12月5日に閣議決定された「好循環実現のための経済対策」において、被災者の住宅再建に係る給付措置が講じられたところ。
- 復興を本格的に推進していく時期に、被災地に配慮した十分な対策が講じられないまま消費税増税といった負担が重くのしかかると、被災地の経済が落ち込み、復興の阻害要因となるおそれがあるところ。

【県担当部局】政策地域部 政策推進室

17 地域公共交通確保維持改善事業における 被災地事業の補助対象の見直し

地域公共交通確保維持改善事業については、平成 27 年度までとされていた被災地特例について、平成 32 年度まで延長されるなど、特別の配慮をいただいているところです。

本県では、本格復興の最盛期を迎え、災害公営住宅の建設や高台団地の整備などが進められているところですが、特定被災地域公共交通調査事業及び被災地域地域間幹線系統確保維持事業において、災害公営住宅や高台団地等の生活拠点を運行する路線は補助対象とされていないことから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 特定被災地域公共交通調査事業の補助対象の見直し

被災市町村においては、復興によりまちづくりが進み、生活拠点が応急仮設住宅から災害公営住宅や高台団地などに移行している途上にあることから、被災者の生活の足を確保するため、また、復興後の持続的かつ利便性の高い交通体系の構築を図るため、応急仮設住宅に加え、災害公営住宅や高台団地等の生活拠点を運行する路線についても幅広く補助対象とするよう要望します。

2 被災地域地域間幹線系統確保維持事業の激変緩和措置の継続と補助対象の見直し

被災市町村においては、新たなまちづくりの途上であり、応急仮設住宅のみならず、災害公営住宅や高台団地への交通確保のため、幹線バス路線の延伸等を行っております。このことにより、補助路線の輸送量が低下し、補助要件割れをきたす恐れがあることなどから、一定程度まちづくりが完了するまでの間、激変緩和措置を継続するとともに、災害公営住宅や高台団地等の生活拠点を運行する路線について幅広く補助対象とするよう要望します。

【現状と課題】

1 特定被災地域公共交通調査事業の補助対象の見直し

- 被災市町村では、当該事業を活用しながら、仮設住宅居住者等の生活交通を確保。
- 当該事業の実施期間は、平成 27 年度までとされていたが、平成 32 年度まで延長。
- 被災市町村においては、新たなまちづくりの途上であり、応急仮設住宅のみならず、災害公営住宅や高台団地への交通確保のため、幹線バス路線の延伸等を行っており、このことにより、補助路線の輸送量が低下し、補助要件割れをきたす恐れがあることなどから、一定程度まちづくりが完了するまでの間、災害公営住宅や高台団地等の生活拠点を運行する路線について幅広く補助対象とする必要。

区 分	内 容
補助上限額	6,000万円（定額） ※H26年度から引上げ（H25年度までは4,500万円）
事業内容	応急仮設住宅と病院、商店、公的機関の交通確保のための調査及び実証運行（公共交通利用実態調査、デマンドタクシーや乗合バスの実証運行等）
補助対象期間	平成32年度まで
導入市町村 (H28)	【10市町村】 ※補助対象市町村：沿岸12市町村 宮古市、大船渡市、久慈市、陸前高田市、釜石市、大槌町、山田町、岩泉町、 田野畑村、野田村

2 被災地域地域間幹線系統確保維持事業の補助対象の見直しと激変緩和措置の継続

- 幹線バス路線を維持するため、バス事業者に対し運行欠損額の補助が行われているが、補助要件緩和などの特例措置。
- 平成 27 年度までとされていた特例措置の期間が、平成 32 年度まで延長されたが、対象路線については、応急仮設住宅を通過する路線とされ、通過しない路線は激変緩和措置として、当分の間、輸送量 15 人未満の路線も対象。
- 被災市町村においては、新たなまちづくりの途上であり、応急仮設住宅のみならず、災害公営住宅や高台団地への交通確保のため、幹線バス路線の延伸等を行っていることにより、補助路線の輸送量が低下し、補助要件割れをきたす恐れがあることなどから、一定程度まちづくりが完了するまでの間、激変緩和措置を継続するとともに、災害公営住宅や高台団地等の生活拠点を運行する路線について幅広く補助対象とする必要。

	通常要件	激変緩和措置
輸送量	<u>15人以上 150人以下</u>	<u>150人以下</u> (震災前に国庫補助路線の場合に限る)

【県担当部局】 政策地域部 地域振興室

18 医療提供施設や社会福祉施設の 復旧・復興に向けた支援

東日本大震災津波により、医療機関等が甚大な被害を受けた本県の沿岸市町村においては、今後、まちづくり計画の進捗等に伴い、医療・福祉の復興が完遂する局面を迎えます。

これまで、国において、地域医療再生基金の一定期間の延長や、甚大な被害にあった福祉施設等の災害復旧に係る移転を認める措置などをしていただいたところで

す。これにより、被災した医療機関や福祉施設等の復旧・復興を行ってきましたが、依然として、地域医療再生臨時特例交付金の交付年度間の柔軟な運用や地域医療再生基金の設置期間の更なる延長等の課題があります。

については、地域の実情に応じた息の長い取組による支援が必要となっていることから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 被災した医療機関の復興に向けた継続的な支援

被災した医療機関の復興に向け、これまで被災した医療機関の移転新築等に対する支援や、医師・看護師などの医療従事者の確保等に取り組んできたところですが、資材高騰や新たな医療ニーズの発生など状況の変化に対応しながら復興を着実に進めるためには、復興が完了するまで安定した財源の確保が必要であることから、地域医療再生基金について、交付金間の柔軟な運用を可能にするとともに設置期間の更なる延長を図るよう要望します。

2 児童福祉施設等の復旧に対する支援継続

東日本大震災津波被害により、建物が全壊するなど甚大な被害を被った施設においては、復旧とともに移転を検討しているところですが、用地の確保等に時間を要していることから、平成29年度においても当該災害復旧事業を継続するよう要望します。

また、引き続き、「原形復旧」の原則にとらわれず、施設の移転等を認めるなど、被災地の実情に応じた弾力的な運用を図るよう要望します。

【現状と課題】

1 被災した医療機関の復興に向けた継続的な支援

- 地域医療再生基金を活用して、被災した医療機関の再建や、医師・看護職員修学資金の貸付を行っているが、現状では、平成 27 年度末までに開始した施設整備事業については竣工まで、平成 27 年度末までに開始した設備整備及びソフト事業については平成 29 年度末までが延長実施可能期間。
- 医療機関の移転新築等の候補地がかさ上げや区画整理の対象となり、いまだ施設整備を開始できない事例が発生。
- 即戦力医師招聘事業により招聘した医師（平成 23～27 年度：78 人）の今後の勤務継続の可否、また、平成 28 年度以降に予定されている沿岸部の被災した県立病院再建後の医師、看護師の確保見通しが不透明。
- 震災による精神医療等新たな医療ニーズも生じており、医師、看護師等医療従事者の確保が必要。
- 平成 30 年度以降も継続した支援が必要となる見込みであり、基金の設置期間の延長が必要。

《修学資金制度に要する費用の推移と見込（百万円）》

区 分	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
医師修学資金費用	1,208	1,254	1,288	862
うち基金充当額	205	223	234	-
看護師修学資金費用	195	207	203	207
うち基金充当額	78	80	76	-

※ 新医師確保総合対策（H18）による平成 20 年度からの医学部定員増が平成 29 年度で終了することを前提とした見込額。

2 児童福祉施設等の復旧に対する支援継続

- 東日本大震災津波に伴う災害復旧事業は、実施期間が定められておらず平成 29 年度以降の取扱いが未定。
- 災害復旧は「原形復旧」が原則で、施設の移転にあたっては国と協議が必要とされているが、地域の実情に応じた弾力的な運用が必要。

《社会福祉施設等災害復旧事業を活用した施設の復旧状況》

区 分	平成 27 年度末までに復旧済	平成 28 年度復旧見込	平成 29 年度以降復旧見込	合計
保育所	30 施設	2 施設	1 施設	33 施設
放課後児童クラブ	0 施設	1 施設	4 施設 (2)	5 施設 (2)
児童館	2 施設	2 施設	0 施設	4 施設
子育て拠点	1 施設	0 施設	1 施設	2 施設
合計	33 施設	5 施設	6 施設 (2)	44 施設 (2)

※ () 内は移転協議未了施設数で内数。

【県担当部局】保健福祉部 医療政策室、子ども子育て支援課

19 教育の復興に対する支援

本県では、東日本大震災津波により多くの学校施設等が被災し、今もなお、多くの児童生徒が仮設住宅等での生活を余儀なくされているところです。

これまで国の財政支援により、被災施設の復旧整備が進み、また、被災した児童生徒に対する心理的・経済的両面での支援が行われてきたところですが、被災地はまだ復興途上にあり、まちづくりに合わせて移転が必要な被災施設の復旧整備や児童生徒の居場所の確保、また、震災後しばらく経ってからの発症が予想される心的外傷後ストレス障害（PTSD）等への対応が、今後も必要とされています。

こうした課題に対応するため、公立の学校施設・社会教育施設等の復旧整備に係る継続的な財政支援と児童生徒の心のサポート等、子どもたちに対する長期的な支援が引き続き必要であることから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 公立の学校施設・社会教育施設等の復旧整備に対する支援

被災地の公立の学校施設及び社会教育施設等においては、今後も災害復旧に向けた整備が必要となることから、震災復興特別交付税や東日本大震災復興交付金による確実な予算措置を継続するよう要望します。

2 児童生徒の心のサポートに対する支援

被災により心にダメージを受けた児童生徒の心のサポートについては、中長期的な取組及び多様化するニーズへの対応が必要であることから、スクールカウンセラー（臨床心理士等）やスクールソーシャルワーカー（社会福祉士等）等の派遣等に要する経費について、東日本大震災復興特別会計による確実な予算措置を継続するよう要望します。

3 復興教育の取組に対する支援

郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するため、復興教育の取組推進に対する全面的な財政支援を継続するよう要望します。

4 教職員の確保

被災した児童生徒の心のサポート及び学習支援等に対応するため、復興のための教職員の中長期的な加配措置を継続するよう要望します。

5 大学入試センター試験の被災地臨時会場での継続実施

大学入試センター試験については、平成 28 年度試験に引き続き、当分の間、岩手県立釜石高等学校及び岩手県立大船渡高等学校を臨時会場として実施するよう要望します。

6 児童生徒の放課後の安全・安心な居場所の確保等に対する支援

被災児童生徒のための放課後の安全・安心な居場所の確保及び地域の教育力を活用した学習支援に対する東日本大震災復興特別会計による確実な予算措置を継続するよう要望します。

【現状と課題】

1 公立の学校施設・社会教育施設等の復旧整備に対する支援

- 被災地沿岸部の市町村立小中学校のうち移転を伴わない被災校の復旧整備については、平成 26 年度に完了したところであるが、今後も移転する必要のある被災校の復旧整備が見込まれるため、継続した財政支援が必要。
- 県立学校については、平成 26 年度までに移転新築が必要な全ての学校で校舎等の主要施設の整備が完了したものの、今後も市町村の土地区画事業にあわせたグラウンドや部室の本整備が必要であるため、継続した財政支援が必要。

《学校施設の復旧整備状況》

区 分	被災施設数	平成 27 年度末 復旧済施設	平成 28 年度末 復旧見込施設	平成 29 年度以降 復旧見込施設
小中学校	67 校	51 校	14 校	2 校
県立学校	19 校	19 校	0 校	0 校

- 公立社会教育施設等のうち移転を伴わない施設の復旧整備については、平成 28 年度に完了する見込みであるが、移転する必要のある施設の復旧整備が今後も見込まれるため、継続した財政支援が必要。

《公立社会教育施設等の復旧整備状況》

区 分	被災施設数	平成 27 年度末 復旧済施設	平成 28 年度末 復旧見込施設	平成 29 年度以降 復旧見込施設
社会教育施設	62 施設	55 施設	1 施設	6 施設
文化施設	11 施設	9 施設	0 施設	2 施設
体育施設	54 施設	43 施設	1 施設	10 施設

2 児童生徒の心のサポートに対する支援

- 平成 27 年 9 月に実施した「心とからだの健康観察」の結果では、12 万 8 千人余の児童生徒のうち 11.5%が教育的配慮を必要としている状況。
- 「スクールカウンセラー等の派遣」や「心とからだの健康観察」については、平成 27 年度まで国庫委託事業により実施してきたところであり、平成 28 年度からは国庫補助事業により実施するところであるが、阪神・淡路大震災の際においても、発災直後から 10 年程度心の健康について教育的配慮を要する児童生徒が多くいたことを踏まえ、中長期的な児童生徒の心のサポートに対する支援を実施するための継続した財政支援が必要。
- 児童生徒の抱えるストレスの質が、東日本大震災津波そのものから経済環境・居住環境等、児童生徒を取り巻く環境に起因するものへと変わってきており、平成 29 年度以降も福祉的な視点で支援するスクールソーシャルワーカー等の配置拡充が必要であるため、継続した財政支援が必要。

《スクールカウンセラー配置状況》

区 分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
スクールカウンセラー人数 (配置校数)	67 人 (217 校)	63 人 (215 校)	63 人 (238 校)	63 人 (255 校)	64 人 (264 校)	67 人 (268 校)
巡回型カウンセラー人数 (配置校数)	5 人 (80 校)	8 人 (91 校)	11 人 (114 校)	13 人 (113 校)	13 人 (105 校)	13 人 (100 校)

※1 スクールカウンセラーは、全県の公立学校を対象とし、定期的に配置校を訪問。

※2 巡回型カウンセラーは、被災地の公立学校を対象とし、ニーズに応じ軽重をつけた訪問。

《スクールソーシャルワーカー配置状況》

区 分	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
配置教育事務所	4 事務所	4 事務所	4 事務所	6 事務所	6 事務所	6 事務所
配置人数合計	9 人	9 人	9 人	12 人	14 人	16 人

3 復興教育の取組に対する支援

- 「いわての復興教育」の全県的な推進のため、これまで、推進校の指定、教育プログラムの作成、副読本の作成などに取り組んでいるが、平成 29 年度以降においても復興教育の着実な推進を図り、地域連携型の防災教育の展開など、さらなる特色ある復興教育活動の充実・発展を図るため、継続した財政支援が必要。

《国庫の配分状況－復興教育支援事業費》

	平成 23 年度～平成 24 年度 (繰越事業)	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
国予算枠	200,000 千円	100,000 千円	50,000 千円	26,000 千円	廃止
本県配分額	40,176 千円	30,328 千円	22,002 千円	不採択	—

4 教職員の確保

- 平成 23 年度から、文部科学省からの震災加配を活用し、人的支援が必要な学校に対し教職員を配置してきたが、震災後しばらく経ってからの発症が予想される心的外傷後ストレス障害（PTSD）等への対応のため、平成 29 年度以降も中長期的な児童生徒の心のサポートや学習支援が必要であり、加配措置の継続が必要。

《教職員の加配措置状況》

平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
235 人	227 人	237 人	247 人	247 人	247 人

※小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の合計

5 大学入試センター試験の被災地臨時会場での継続実施

- 大学入試センター試験の県立釜石高等学校、県立大船渡高等学校への臨時会場の設置については、平成 24 年度入試から、これまで 5 年間実施。
- 未だ多くの生徒が応急仮設住宅での生活を余儀なくされており、J R 山田線は未だ復旧していない状況のなか、被災地の大学進学を希望する生徒及び保護者の経済的負担の軽減はもとより、自宅からの受験が可能なことによる心理的負担の軽減など平成 29 年度以降も物心両面の支援が必要であり、被災地臨時会場での継続実施が必要。

《過去 5 か年における大学入試センター試験の臨時会場での志願者数》

試験場	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年
釜石高等学校	178 人	186 人	193 人	192 人	236 人
大船渡高等学校	283 人	302 人	309 人	308 人	284 人

6 児童生徒の放課後の安全・安心な居場所の確保等に対する支援

- 平成 23 年度から、被災児童生徒のため、国庫委託事業を活用し、児童生徒の放課後の安全・安心な居場所の確保及び地域の教育力を活用した学習支援に対し、財政支援が講じられているところ。
- 沿岸被災地においては、災害公営住宅の整備に伴う転居や仮設住宅の集約等によって、日々状況が大きく変化しており、引き続き、学びを通じた地域コミュニティの再生に向け、中長期的な支援が必要であり、今までの支援に加え、ICT 等の整備による学習環境の充実のため、平成 29 年度以降も継続した財政的支援が必要。

《実施事業の実績（平成28年度は見込）》

	放課後子ども教室事業		学校支援地域本部事業		沿岸被災地での学習支援		
	市町村数	教室数	市町村数	本部数	市町村数	実施箇所数	登録人数
平成23年度	(23)	(110)	(16)	(40)	1	3	147
平成24年度	21	115	18	43	5	14	609
平成25年度	22	117	18	43	6	19	410
平成26年度	23	116	18	44	6	19	843
平成27年度	23	113	18	43	7	20	551
平成28年度	17	88	15	50	7	16	304

※ 平成23年度の「放課後子ども教室事業」及び「学校支援地域本部事業」は補助事業として実施

【県担当部局】教育委員会事務局 教育企画室、学校教育室、生涯学習文化課、教職員課

20 復興支援活動を行うNPO法人等への支援の継続

東日本大震災津波からの復興に向けて、平成23年度より被災地域におけるNPO法人等への活動費助成等に係る財源を措置していただいておりますが、継続的かつ安定的な復興支援活動を行っていくためには、今後も十分な財源の確保が必要であるため、国による支援の継続について要望します。

《 要望事項 》

1 復興支援活動を行うNPO法人等への支援の継続

復興・被災者支援活動に大きな役割を果たしているNPO法人等が継続的かつ安定的に活動できるために、平成29年度以降もNPO等の活動への支援を継続するよう要望します。

【現状と課題】

- 平成23年度に、新しい公共支援事業によりNPO法人等への活動費助成（10/10）が開始。同事業は平成24年度限りで廃止され、平成25年度から「復興支援活動を行うNPO等への支援」という新しいスキームで被災3県を対象とする新規事業を措置し、平成27年度まで実施。
- 平成28年度より、NPOが活用可能な構成事業を含む「被災者支援総合事業」のほか、内閣府において従前の事業を再構築した「NPO等の絆力を活かした復興・被災者支援事業」により活動への支援が継続されることとなったところ。
- このうち、「NPO等の絆力を活かした復興・被災者支援事業」については、平成29年度以降の事業継続について明記されておらず、継続されない場合、今後、財政基盤の強化が必要なNPO法人の復興支援活動に支障が生じることを懸念。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
沿岸NPO 法人数	55	65	86	100	114	118
増加率 (H22年度比)	-	118.2%	156.4%	181.8%	207.3%	214.5%

【県担当部局】環境生活部 若者女性協働推進室

21 水産業の復旧・復興支援

これまで、漁業就業者の確保・育成に係る給付金制度、水産加工事業者の販路回復への支援、養殖施設の整備等について措置をしていただいたところです。

これにより、本県の漁業生産量は震災前の約7割程度まで回復しているところですが、より一層の水産業の復興を図るため、漁業と流通・加工業の一体的な再生に向けた取組が必要な状況にあります。

こうした課題に対応するため、以下のとおり新たな制度創設や支援の継続について要望します。

《 要 望 事 項 》

1 漁業と流通・加工業の一体的な再生

- (1) 漁業就業者の確保・育成に向けた支援を継続・拡充するとともに、漁業就業者の独立起業を促進するため、収入が不安定な経営開始直後を対象とした支援制度を創設するよう要望します。
- (2) 販路の回復や新規開拓を行う水産流通加工事業者に対する支援の継続・拡充及び漁獲から流通・加工までの一貫した産地づくりの取組を行う地域への支援を創設するよう要望します。
- (3) 復興が果たされるまでの間、地域の復興状況に応じた養殖施設等の生産基盤の追加整備など、生産力の回復に必要な施設等の整備に対する支援を継続するよう要望します。

【現状と課題】

1 漁業就業者の確保・育成に向けた支援

- 漁業センサスによると、県内漁業就業者数は東日本大震災津波前の約6割まで急激に減少しており、水産業の復旧・復興を図るためには就業者の確保・育成を一層、推進していくことが必要。

	平成 15 年	平成 20 年	平成 25 年
漁業就業者数	10,472 人	9,948 人	6,289 人

- 創設された青年就業準備給付金制度は、漁業学校等での研修が必要であり、漁業学校等がない本県では適用が困難。このため、同制度の継続と併せ、給付要件の緩和など支援の拡充が必要。また、収入が不安定な経営開始直後の経営リスク軽減を図るため、漁業分野においても農業分野における青年就農給付金（経営開始型）と同様の制度の創設が必要。

2 販路の回復等に向けた支援

- 県の被災事業所復興状況調査によると、売上等の業績が震災前を下回っている水産加工事業所が7割以上を占めていることから、水産物の販路回復・拡大に向けた支援の継続が必要。
- 水産加工事業者の販路回復等にかかる支援措置をしていただいたところであり、平成27年度に13社で事業が採択され今年度も21社の要望があるが、抜本的に販路回復を図るためには、消費者から選ばれる産地として成立する必要があるが、水産加工事業者に対する支援だけでなく、地域における漁獲から流通加工まで一貫した衛生品質管理や、生産者と加工業者が連携した取組への支援が必要。

3 施設等の整備に対する支援

- 被災した漁船や養殖施設等の復旧に関しては、漁業者等の希望を概ね満たす水準まで整備が進んだが、養殖施設数は震災前の約6割に止まるなど、地域の生産力は震災前よりも減退していることから、生産力の回復を図るためには、担い手の確保・育成と併せて養殖施設の追加整備が必要。

<参考> 継続・拡充の基礎となる国の事業

- 漁業就業者の確保・育成に向けた支援：新規漁業就業者総合支援事業
- 販路の回復に向けた支援：復興水産加工業販路回復促進事業、国産水産物流通促進事業
- 施設等の整備に対する支援：水産業共同利用施設復旧整備事業など

【県担当部局】 農林水産部 水産振興課

これまで、サケの種苗放流経費への支援、サケ資源減少要因の究明に向けた調査、内水面資源量調査への支援等について措置をしていただいたところです。

これにより、サケは震災前と同等の4億尾の放流尾数を確保できたところですが、震災の影響により、今後も回帰親魚の減少が予想されています。

本県では漁協を核とした震災からの復興を目指しており、漁協の経営安定化のために引き続き親魚確保やこれを補完する措置への支援が必要な状況にあります。

こうした課題に対応するため、以下のとおり支援の継続や新たな対策への措置について要望します。

《 要 望 事 項 》

2 サケ等栽培漁業の再生

- (1) 震災の影響により減少したサケの種苗放流について、生産量の回復によって漁業者・漁協が経費を負担することができるようになるまでの間、これらの経費への支援を継続するよう要望します。
- (2) 減少している太平洋沿岸のサケ資源の回復を図るため、資源変動要因を解明するとともに、地球温暖化等の環境変動に対応するため、国内サケ資源の系群維持の対策等を講じるよう要望します。
- (3) サクラマスなどの新たな資源を造成するための研究開発事業を創設するとともに、漁協等が行う資源造成経費を支援するよう要望します。

【現状と課題】

1 サケの種苗生産・放流に要する経費への支援

- 国によりサケの種苗放流に係る経費を支援いただき、震災前と同程度の放流尾数を確保できたが、当支援はH28年度で終了する見込。しかし、震災後ふ化施設の復旧途上で種苗放流尾数が少なかった時期の影響を受け、H30年度までは回帰親魚の減少が予想。

＜本県サケ放流尾数と被災海域における種苗放流支援事業費＞

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
放流尾数（百万尾）	416	291	316	390	409	381
事業費（百万円）	-	398	446	360	546	698
国費（百万円）	-	266	297	240	364	464

- サケの放流事業主体である各漁協は、東日本大震災津波の復旧・復興事業による多額の負債を抱えている状況。
- これに加えて、親魚不足に対応して海産親魚の利用等に係る経費が新たな負担となっており、サケの種苗生産・放流に要する経費が増大していることから、各漁協による自立的な種苗生産・放流体制の再構築には、本県の水産業が震災前の水準に戻るまでの間、引き続き国による支援が必要。

2 太平洋沿岸のサケ資源の変動要因の解明と系群維持の対策

- 本県のサケ回帰率は、かつて3～5%を推移していたが、平成11年度～21年度は2%前後、22年度以降は1%前後と低迷。
- サケ回帰資源の減少は、サケを収入の要としている各漁協の経営悪化に繋がり、漁協を核とした漁業・養殖業の復興を妨げる一因となることから、サケ資源の変動要因を解明し、稚魚生産・放流技術の改善等の対策が必要。
- 特に近年は、地球温暖化等による環境変動により、本県沿岸の春季水温の上昇が早まり、サケ稚魚の生残が低下し、ひいては回帰資源の減少につながると考えられており、本県固有の系群維持のための対策が必要。

3 サクラマスの子苗生産・試験研究に要する経費への支援

- 春季の来遊資源であるサクラマスは、高単価で市場取引されており、秋季のサケ漁獲量が低迷している中、新たな栽培漁業の対象種として、また、内水面振興の資源として、漁協等からの要望が高まっていることから、サクラマス資源の造成技術を開発するとともに、子苗生産・放流の経費に対する支援が必要。

【県担当部局】 農林水産部 水産振興課

22 被災企業等への支援策の継続

これまで、国において、被災企業等の事業再開に向けた各種補助制度や税制特例制度の創設、二重債務問題解決のための支援機関の設置といった措置をしていただいたところです。

これにより、被災企業等の早期事業再開がなされるなど、被災地の産業復興、なりわいの再生が進んでおりますが、区画整理事業等まちづくりの進捗に合わせて、これから本設移行が本格化する地区があるなど、今後も、各種支援策を利用する事業者が多数見込まれます。

こうした状況に対応するため、各種補助制度や支援機関の継続、被災地の実情に応じた柔軟な制度運用等について要望します。

《 要 望 事 項 》

1 中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業の継続

被災事業者の施設・設備の復旧を支援するため、平成 29 年度以降も、中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業を継続するよう要望します。

また、既に交付決定した事業者について、複数年度にわたって事業実施できるように必要な予算措置を講ずるよう要望します。

2 二重債務問題解決のための支援策の継続

被災事業者の二重債務問題の解決に向け、引き続き債権買取支援等を行うため、平成 29 年度以降も産業復興相談センターによる支援を継続するとともに、東日本大震災事業者再生支援機構にあっては、被災地の復興状況に鑑みて、支援決定業務の期間を延長するよう要望します。

3 津波・原子力災害被災地域雇用創出企業立地補助金の柔軟な対応等

(1) 被災地における商業機能の早期回復に大きな役割を果たすことが期待される商業施設等復興整備補助事業について、市町村長が策定する「まちなか再生計画」の認定に当たり、引き続き被災地の実情に応じて柔軟に対応するよう要望します。

(2) 産業振興による雇用創出に大きな効果が期待される製造業等立地支援事業について、被災地における産業復興の実情に応じ、復興に係る期間を通じて事業実施に十分な予算を確保するよう要望します。

4 仮設施設有効活用等助成事業の柔軟な対応

かさ上げ工事や土地所有者等の事情により、やむを得ず撤去、移設せざるを得なくなった仮設施設の移設費、撤去費等を助成する仮設施設有効活用等助成事業は、完成後5年を超える施設については、「土地所有者等の事情」が「復興推進のための土地活用等」とされるなど、助成対象が限定されています。

については、完成後5年を超える施設の撤去等について、市町村の過重な負担としないため、助成要件の適用に当たって地域の事情を踏まえて柔軟に対応するよう要望します。

5 復興特区における税制上の特例に係る確実な措置等

復興特区における税制上の特例措置については、被災地の状況を踏まえ、産業復興や産業集積の十分な支援となるよう不断に制度を見直すとともに、地方税の課税免除又は不均一課税に伴う減収について、平成29年度以降においても従前と同様に補填するよう要望します。

【現状と課題】

1 中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業の継続

- 被災企業等の早期事業再開において、グループ補助金が活用されてきたところ。
- 複数年にわたり事業実施できるよう再交付の手続を行うためには、毎年度、そのための予算措置が必要。

≪グループ補助金の繰越・再交付の状況

≪グループ補助金の交付決定状況≫

区分	事業者数	交付決定額
H23	30グループ 295者	437億円
H24	65グループ 864者	316億円
H25	16グループ 85者	29億円
H26	10グループ 25者	8億円
H27	17グループ 67者	25億円
合計	138グループ 1,336者	815億円

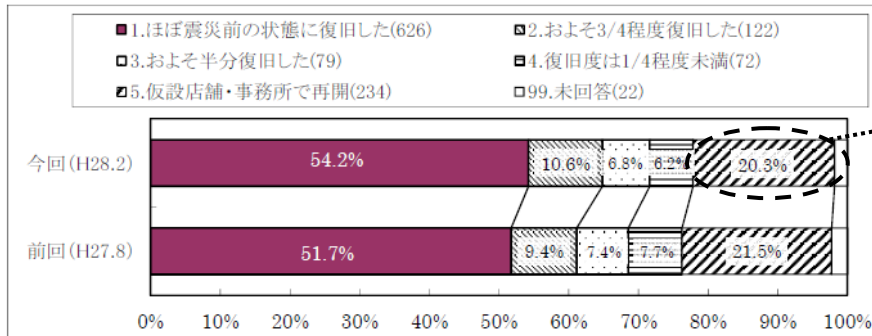
(H27⇒H28(県予算ベース)) ≫

	件数	金額
明許繰越	203件	76億円
事故繰越	一件	－円
再交付	62件	24億円

(いずれも平成28年3月末現在)

- 現在、仮設施設に入居する商工業者は、881事業者* (平成28年3月末現在) おり、今後、区画整理事業等の進捗に伴って、当該事業者の本設移行が見込まれるところ。
※ 中小企業基盤整備機構が整備した仮設施設入居者数
- 震災の被害が甚大で、区画整理事業等が遅れている地域においては、建物の着工が平成29年度以降となる事業者が多く、県に対してグループ補助事業の継続実施の要望が寄せられているところ。

《事業所の復旧状況》



仮設店舗等で再開 (20.3%)
⇒ これらの多くは本設移行の際に補助事業の活用が見込まれる

※ 出典：岩手県「平成 27 年第 2 回被災事業所復興状況調査」

《参考～区画整理事業の進捗状況（事業者が着工可能な宅地戸数）》

(単位：戸)

	～H26	H27	H28	H29	H30～	計
戸数	999	1, 227	1, 919	2, 021	1, 538	7, 485

H29 以降比率	47.5%
----------	-------

※ 出典：岩手県「社会資本の復旧・復興ロードマップ」

2 二重債務問題解決のための支援策の継続

- 産業復興相談センター等の事業継続には運営費など国の予算措置が必要。

《産業復興相談センターの支援状況（平成 28 年 3 月末累計）》

相談企業数	左記のうち主な対応			債権買取等支援に向けた検討・作業中
	債権買取	長期返済猶予	新規融資	
980	106	61	22	32

《東日本大震災事業者再生支援機構の支援状況（平成 28 年 3 月末累計）》

相談件数	支援数	支援の内訳			支援決定に向けた最終調整件数
		大口	中口	小口	
474	162	5	47	110	2

※大口：借入金 10 億円以上、中口：借入金 1～10 億円未満、小口：1 億円未満

3 津波・原子力災害被災地域雇用創出企業立地補助金の柔軟な対応等

《商業施設等復興整備補助事業》

- 補助採択の前提として、「まちなか再生計画」の国の認定が必要であるが、その認定基準が多岐にわたっており、市町村等における策定作業に相当の労力や時間を要することが見込まれる状況。

「まちなか再生計画」の認定基準
周辺住民等に必要な各種施設、商業施設や戸建店舗の配置、区域内の動線確保、回遊性、滞留性 等

《製造業等立地支援事業》

- 被害の甚大な地域では、住宅再建や市街地エリアの形成に先行して取り組んでおり、産業用地の確保には相当の時間を要する状況。
- 被災地に制度の効果が十分浸透するよう、予算の確保が必要。

4 仮施設有効活用等助成事業の柔軟な対応

- 5 年を超える仮施設の撤去等費用の助成は、「土地所有者等の事情」が「復興推進のための土地利用等」とされるなど要件が限定されているところ。

- 仮設施設によっては、当該要件に該当するかどうか明確に判断できない場合も見込まれる状況。これらが助成対象とならない場合、市町村の撤去等費用負担が大きくなることが懸念。
- よって、助成要件の適用に当たっては、「復興推進のための土地活用等」を限定的に捉えず、土地所有者の求めに応じて撤去せざるを得ない場合は助成対象とするなど、柔軟に対応するよう要望するもの。

《仮設施設の状況（平成28年3月末累計）》

完成数		撤去済み数	事業者へ譲渡済み数	中小機構が整備した仮設施設の現存数
箇所数	区画数			
362	1811	30	9	323

5 復興特区における税制上の特例に係る確実な措置等

- 復興産業集積にかかる復興特区制度は、多くの事業者が指定を受け、被災者の雇用や設備投資に活用されている状況。

事業者数	被災者等の雇用計画の総数	施設・機械等の投資計画の総額
477 者	12,677 人	1,941 億円

（平成28年7月31日現在）

- 復興特区における税制上の特例措置は、これまで復興産業集積を進めるうえで大きな役割を果たしてきており、平成28年度税制改正により5年間延長（平成33年3月31日まで）されたところ。

復興特区における主な税制上の特例措置		延長の措置		
制度区分		～H28.3.31	H28.4.1～H31.3.31	H31.4.1～H33.3.31
設備投資に係る特例 (法人税等)	特別償却	機械装置 100%	機械装置 50%	機械装置 34%
		建物等 25%	建物等 25%	建物等 17%
	税額控除	機械装置 15%	機械装置 15%	機械装置 10%
		建物等 8%	建物等 8%	建物等 6%
雇用に係る税額控除 (法人税等)		10%	10%	7%

- 被災地では地域の被災の程度によって、大規模な嵩上げや高台移転を要する地域など復興の進み方もそれぞれ異なり、商業者を始めとして平成31年度以降に本設再開を予定する事業者も想定されていることから、今回、税制上の特例措置が延長されたが、引き続き、被災地の状況を踏まえた、制度運用が行われるよう不断の見直しが必要。
- 国税の特例措置と併せて実施されている地方税（事業税、固定資産税等）の課税免除又は不均一課税については、総務省令により平成28年度分の地方自治体に対する減収補填が措置されたが、平成29年度以降も地方自治体が、引き続き産業復興、産業集積の状況を踏まえて地方税の減免等を実施できるよう、減収補填の確実な措置が必要。

【県担当部局】 商工労働観光部 経営支援課、ものづくり自動車産業振興室
 農林水産部 団体指導課
 復興局 産業再生課
 政策地域部 市町村課

23 被災地における産業人材の確保

国において、事業復興型雇用創出事業の実施等の対応をいただいているところですが、被災地では、有効求人倍率の高止まりが続き、地域内において産業人材を確保することが困難な状況にあります。

特に、地域の基幹産業である水産加工業においては、その影響により業績回復に遅れが生じるなどしていることから、人材確保に向けた取組の充実や、事業復興型雇用創出事業の事業実施期間の延長等について、次のとおり要望します。

《 要望事項 》

1 産業人材確保に向けた取組の充実

県や市町村において、地域外からも人材を確保するため、首都圏等に対する情報発信や人材の受入れに必要な宿舎確保のための補助などの対策を講じているところですが、被災地域だけの取組では限界があることから、国レベルで、既存の制度にとらわれない総合的な対策を講じ、強力に推し進めるよう要望します。

2 被災地における外国人技能実習生の受入れ拡大等

外国人技能実習生の受入れは、地域における産業人材の確保にも一定の効果があることから、その受入れ人数の拡大を図るため、外国人技能実習制度見直しの早期実現及び構造改革特別区域制度の柔軟な運用を要望します。

併せて、建設分野において講じられた外国人材の活用に係る緊急措置に準じ、被災地の雇用情勢に対応した措置を講じるよう要望します。

3 事業復興型雇用創出事業の事業実施期間の延長等

被災地域の事業所においては、正規雇用の確保に時間を要することから、平成28年度末までとされている「事業復興型雇用創出事業」について、事業所の業績が被災以前の状態に回復するまで、事業実施期間を延長するよう要望します。

また、助成対象労働者の要件及び再雇用者に関する割合要件を緩和するとともに、助成対象事業所に大企業を追加するよう要望します。

【現状と課題】

1 被災地における雇用情勢等

- 震災後、復興需要の高まり等により、被災地では有効求人倍率が1倍を大きく上回る状況が続くなど人材不足が深刻。
- 事業を再開した事業所の多くでは、「販路の喪失」、「業績の悪化」とともに「労働力の確保」が課題。
- 被災地では生産年齢人口の減少により人材の確保が困難となっており、販路があっても労働力不足により売上が回復しない事業所も多い状況。
- まちづくり計画との関係から事業再開に時間を要する事業者が多数いることから、事業着手が平成29年度以降となることや事業所の本設再開、拡大等に伴う追加雇用を想定。

(参考) ① 岩手県の有効求人倍率の推移

		H27. 8	H27. 11	H28. 2	H28. 5
岩手県計		1. 27	1. 29	1. 25	1. 16
沿岸	宮古	1. 45	1. 52	1. 23	1. 17
	釜石	1. 21	1. 41	1. 37	1. 36
	大船渡	1. 74	1. 87	1. 67	1. 53

※「一般職業紹介状況」(厚生労働省)

② 被災事業所が抱える課題(主なもの)

全事業	販路の喪失等 44.1%	業績の悪化 38.6%	労働力の確保 34.4%
水産加工業	材料の調達 55.4%	労働力の確保 53.0%	業績の悪化 36.1%

※「被災事業所復興状況調査 H28年2月」(岩手県)

2 産業人材確保に向けた取組の充実

- 県・市町村において、地域外からも人材を確保するため、水産加工業を中心に、大手就職サイトを活用した情報発信や宿舍の整備に対する支援など対策を講じているが、依然として厳しい人材難が続いており、特に地域外からの確保については限界があることから、国レベルで総合的な対策が必要。
- 国においても、事業復興型雇用創出事業の継続などしているが、被災地に人材を呼び込む仕掛けなど、既存の制度にとらわれない抜本的な取組みが必要。

3 外国人技能実習生の受入れ拡大等

被災地の水産加工業は、地域の重要な産業人材として外国人技能実習生を受け入れてきた実績があり、震災後は復興に必要な人材として一層重要性が高まってきていることから、受入枠の拡大等が必要。

(1) 外国人技能実習制度の見直しの早期実現

- 国が平成26年6月に示した『日本再興戦略』改訂2014における外国人技能実習制度の見直し方針に基づき、関連法案が国会に提案されていることから、早期の成立及び現場の実情に即した技能実習期間の延長や受け入れ人数枠の拡大などの実現が必要。

(2) 構造改革特別区域制度の柔軟な運用

- 構造改革特別区域制度において、「外国人技能実習生受入れによる人材育成促進事業」として、常勤の職員数が50人以下の企業の受入枠を「3人」から「6人」とすることができる特例が設けられており、本県においても宮城県と共同で申請したが、監理団体における適切な受入

実績を求める要件（失踪や不法残留した事例がないこと等）に適合しないため、調整した10事業者者中1事業者の認定にとどまっている状況。

- 監理団体や実習実施機関の責めに帰すべき理由がない失踪については、認定要件を満たさない事由としないなど、制度の柔軟な運用が必要。

（3）外国人材の活用に係る緊急措置

- 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の関連施設整備等による建設需要の増大に対応するため、建設分野における外国人材の活用に係る緊急措置が講じられているもの。
- 被災地についても、震災により発生した雇用環境などの特別な事情に対応し、建設分野に準じた制度を東日本大震災復興特別区域法等により創設するなど、外国人材の活用を図ることができる緊急かつ時限的な措置が必要。

4 事業復興型雇用創出助成金による雇用創出の状況

- 助成金の活用により被災求職者の安定的な雇用が創出されてきたところ。
一方、平成27年度から、助成対象地域が沿岸12市町村に、助成対象事業所が平成27年度に事業開始した事業所に限定されるなど、助成対象が絞り込まれ認定者が激減(注)したため要件の緩和が必要。
さらに、平成28年度からは、助成対象事業所が中小企業者のみに限定されたところであるが、大企業も対象とすることが必要。

事業復興型雇用創出助成金による雇用創出					(単位：人)	
	平成23年度 (実績)	平成24年度 (実績)	平成25年度 (実績)	平成26年度 (実績)	平成27年度 (見込み)	計
事業所数	29	1,287	1,394	561	85	3,356
認定者数	139	5,332	7,900	4,270	240	17,881

【県担当部局】復興局 産業再生課

商工労働観光部 雇用対策・労働室

24 観光復興に向けた支援策の拡充

これまで、国において復興交付金効果促進事業費（一括交付金）を県も活用できるよう条件緩和するとともに、今年度、東北観光復興対策交付金を創設していただいたところですが、県全体の観光客入込数は、概ね震災前の水準まで回復したものの、被災した沿岸地域では震災前の約8割にとどまっています。また、外国人観光客数は、過去最高を記録したものの、全国と比べると伸びが低いことから、誘客促進の総合的な支援措置について、必要な額を確実に予算措置するよう、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 沿岸地域の誘客促進への支援

沿岸地域への誘客を促進するため、新幹線の駅や空港等の交通拠点から離れた地域である本県沿岸の地理的な不利を解消する二次交通の拡充や、観光地の再生などに対する総合的な支援策について東北観光復興対策交付金などの活用も含め、被災地の観光地づくりが軌道に乗り、誘客の拡大と定着が図られるまでの間、必要な額を確実に予算措置するよう要望します。

2 海外からの誘客促進への支援

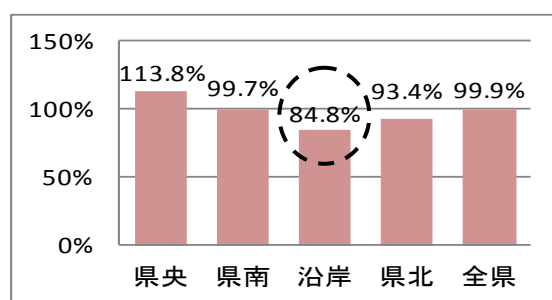
本県をはじめ東北地域への海外からの誘客を促進するため、今年度に創設された東北観光復興対策交付金などによる支援について、外国人観光客の誘客の拡大と定着が図られるまでの間、必要な額を確実に予算措置するよう要望します。

【現状と課題】

1 沿岸地域の誘客促進への支援

- 観光客入込数は、県全体では概ね震災前の水準に回復しているものの、被災した沿岸地域は震災前の約8割にとどまっている状況。
- 本県は県土が非常に広く、沿岸地域は新幹線の駅や空港等から遠距離にあるが、二次交通が不十分であり、沿岸地域への観光客の誘導が進んでいない状況。

観光客入込数（延べ）H27.1-12月対H22比



※沿岸は被災12市町村。県南は住田町を含む。

- このため、二次交通の拡充、復興ツーリズム推進などのほか、宿泊施設のトイレの洋式化やWi-Fi環境などの受入態勢整備を進める必要。

2 海外からの誘客促進への支援

- 訪日外客数が過去最高を記録し約2,000万人となるなか、本県を含む東北地域に対しては未だに放射能の風評被害が根強い市場があり、外国人宿泊者数の伸びが全国と比べると低い状況(全国H22比233%⇔本県H22比119%)。

【県担当部局】 商工労働観光部 観光課

25 再生可能エネルギー導入促進に向けた支援

これまでも、国から自立・分散型エネルギー供給体制の確立に向けた支援事業等の措置をいただいているところですが、本県では東日本大震災津波からの復興にあたって、再生可能エネルギー資源を最大限活用したさらなる取組を進めていく必要があることから、支援の継続について要望します。

また、電力系統への接続制約や接続費用の地域間格差などの課題に対応するため、送配電網の充実・強化や接続制約の低減が図られるよう要望します。

《 要 望 事 項 》

1 自立・分散型エネルギー供給体制の確立に向けた施策の展開

- (1) 非常時において、エネルギーの自立が可能となる施設の拡大を図るため、再生可能エネルギー事業者支援事業費補助金、再生可能エネルギー電気・熱自立的普及促進事業費補助金など、自家消費型設備の導入支援事業を継続するよう要望します。
- (2) 電気自動車は、環境配慮のみならず、防災拠点などにおける非常用電源として活用可能であることから、普及拡大に向けた充電設備整備支援を継続するよう要望します。

2 電力系統の接続可能量拡大に向けた送配電網増強施策等の展開

- (1) 再生可能エネルギーの接続可能量を拡大するとともに、出力制御を極力低減するために、昨年4月に発足した電力広域的運営推進機関による送配電網の着実な整備や、蓄電池などによる系統安定化対策を含む送配電網の充実・強化施策を展開するよう要望します。
- (2) 電力インフラが脆弱な地域等においては、接続費用が調達価格算定で想定する費用を上回るなど地域間格差が生じています。再生可能エネルギーを活用して地域の発展・振興を目指す市町村の計画を支援するため、地域間格差解消に向けた施策を展開し、接続制約の低減を図るよう要望します。

【現状と課題】

1 自立・分散型エネルギー供給体制の確立に向けた施策の展開

(1) 自家消費型設備の導入支援事業の継続

- 東日本大震災津波の際の長期間にわたるエネルギーの途絶を繰り返さないために、エネルギーの自立ができる施設の拡大が必要。平成 28 年度予算で措置された再生可能エネルギー事業者支援事業費補助金など自家消費型設備の普及拡大に向けた導入支援施策の継続が必要。

(2) 電気自動車の普及に向けた充電インフラ整備

- 宮古市や北上市などのスマートコミュニティ構想において、非常時の電源供給手段として電気自動車の活用を位置付けているところ。
- 国にあっては、高率の補助制度を設け、都道府県が策定する充電インフラ整備ビジョンに基づく設備設置を支援しているところであるが、復興まちづくりを進めながら充電インフラ整備を行うためには、一定程度の期間が必要であることから、支援の継続が必要。

〈本県における次世代自動車充電インフラ整備状況〉

岩手県次世代自動車充電インフラ整備ビジョン (H25.7 策定) に掲げる整備予定箇所数	整備状況	進捗率
主要幹線道路 286 箇所	79 箇所	27.6%
市町村 286 箇所	67 箇所	23.4%
合計 572 箇所	146 箇所	25.5%

2 電力系統への接続可能量拡大に向けた送配電網増強施策等の展開

(1) 送配電網の充実・強化

- 東北電力管内では太陽光発電の接続可能量は既に超過しており、今後の再生可能エネルギーの導入拡大を図るためには、送配電網の充実・強化が不可欠。

〈固定価格買取制度 (FIT) による本県設備認定等の状況〉

	①認定実績		②導入実績		県内導入率 ②÷①	全国導入率
	件数	容量 (kW)	件数	容量 (kW)	(%)	(%)
太陽光 (10kW 未満)	11,169	51,721	9,975	45,730	88.4	85.1
太陽光 (10kW 以上)	7,804	2,406,302	2,519	235,267	9.8	31.0
内、1,000kW 以上	213	2,046,138	58	132,640	6.5	22.2

※1 H28.7.11 資源エネルギー庁公表資料より抜粋 (H24 年 7 月～H28 年 3 月末までの累計)

※2 表のとおり、メガソーラーのみで、今後、1,913,498kW の設備導入が見込まれているところ。

※3 導入率は容量 (kW) で比較

- 国では、電力システム改革の第一弾として、電源の広域的な活用に必要な送配電網の整備を進めるとともに、全国大で平常時や緊急時の電力需給の調整機能の強化を図る機関 (電力広域的運営推進機関) を昨年 4 月 1 日に発足させたところ。今後、接続制約の低減に向け、当該機関が適切に調整機能を果たしていくことが必要。

(2) 接続費用の地域間格差解消

- 固定価格買取制度では、系統への接続費用を考慮した調達価格としているが、価格は全国一律である一方、電力消費地から離れている地域にあっては、電力インフラが脆弱であり、接続のための設備増強費用が高額になる場合もあるため、接続費用負担の地域間格差を埋めるための施策展開が必要。

項 目	接続単価
・固定価格買取制度における太陽光発電に係る接続費用 (調達価格等算定委員会公表資料より)	1.35 万円/kW…①
・県内の接続費用の事例 (釜石市 2MW のメガソーラー (接続費用 5 億円))	25 万円/kW…②
接続費用の地域間格差 (②-①)	23.65 万円/kW

【県担当部局】 環境生活部 環境生活企画室

26 国際リニアコライダー（ILC）の実現

国際リニアコライダー（ILC）は、基礎科学の研究に飛躍的発展をもたらすとともに、世界最先端の研究を行う多くの人材が定着・交流する国際科学技術イノベーション拠点の形成や、精密実験を支える先端産業の集積につながるものです。

また、ILCの実現は、科学技術創造立国の実現や高度な技術力に基づく、ものづくり産業の成長発展に大きく寄与するものであることから、次のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 国際リニアコライダー（ILC）の実現

ILCの国内誘致の政府判断までのプロセス等について具体的に明示するとともに、資金の分担や研究参加に関する国際調整などを速やかに進め、ILCの国内誘致の方針を早期に決定するよう要望します。

【現状と課題】

- ILCが実現した場合、宇宙誕生や質量の起源など、人類存在の核心に迫る謎の究明が進み、日本が世界に、そして人類に対して大きく貢献するとともに、科学技術創造立国の実現や高度な技術力に基づくものづくり産業の成長発展のみならず、日本再興や地方創生にも大きく寄与するもの。

《 ILCをめぐる動き》

- ・ 日本の研究者で組織される立地評価会議は、ILCの国内候補地について、技術的観点及び社会環境の観点から詳細な評価を行い、平成25年8月、北上サイトが最適であると発表。
- ・ 平成26年2月、高エネルギー加速器研究機構（KEK）は、機構長を室長とする「ILC推進準備室」を設置。
- ・ 平成26年5月、文部科学省は、平野真一名古屋大学名誉教授を座長とする「ILCに関する有識者会議」を設置し検討を開始。「素粒子原子核物理作業部会」と「技術設計報告書検証作業部会」の2つの作業部会を設置して検討を進め、平成27年6月にこれまでの議論を中間取りまとめ。
- ・ 平成27年11月、新たな作業部会として「人材の確保・育成方策検証作業部会」を設置し、平成28年7月に部会の報告書を取りまとめ。

【県担当部局】 政策地域部 科学ILC推進室

27 東北マリンサイエンス拠点形成事業の継続及び高度専門人材育成拠点の整備への支援

震災により激変した海洋環境・生態系を調査する東北マリンサイエンス拠点形成事業の平成31年までの事業継続をはじめ、被災した研究機関への支援など、特段の御配慮をいただいているところです。

今後、水産業をはじめとする地元産業の本格復興を果たすためには、長期にわたって調査事業を継続する必要があるため、それを担う高度専門人材の育成も含め、以下のとおり要望します。

《 要望事項 》

1 東北マリンサイエンス拠点形成事業の長期・安定的な継続

東北マリンサイエンス拠点形成事業による海洋・水産関係の研究は、復興を目指す地元の漁業者等との密接な連携の下で実施され、研究成果が地域に還元されるなど、復興事業として大きく貢献していることから、同事業の確実な継続及び事業実施に必要な予算の措置を講じるよう要望します。

2 三陸沿岸水産業の復興・創生を担う高度専門人材の育成拠点の整備

国立大学法人岩手大学は、平成28年度から新たに設置した水産系コースにより、三陸沿岸の地域産業に根差した高度専門人材育成に取り組んでおり、今後、大学院レベルの人材育成も予定しています。これらの取組は三陸沿岸地域の真の復興に必要不可欠であることから、当該教育研究施設を整備するよう要望します。

【現状と課題】

1 東北マリンサイエンス拠点形成事業の継続

- 同事業による海洋・水産業の研究成果が地域に還元されるなど、復興事業として大きく貢献している一方、海洋環境・生態系の回復や漁業水産業の復興には長い時間を要することから、同事業の確実な継続と事業実施に必要な予算の確保が必要。

2 三陸沿岸水産業の復興・創生を担う高度専門人材の育成拠点の整備

- 岩手大学は、平成 29 年度に大学院地域創生専攻に水産業革新プログラムを開設する予定であり、三陸沿岸をフィールドとして水産業の人材育成を行い、地域イノベーションの創出を通じた三陸水産業の復興・創生を目指しているもの。現在、釜石市平田地区に三陸水産研究センター（2,000 m²）はあるが、学生のための講義室及び実験・実習室が不足。学部生は 3 年次から、修士学生は 1 年次から釜石をフィールドとして教育研究を行うが、そのための教育研究施設（建物 1,200～1,500 m²）の整備が課題。

【県担当部局】 政策地域部 科学 I L C 推進室

28 国際海洋再生可能エネルギー研究拠点の構築

本県では、海洋基本法や国の「海洋再生可能エネルギー利用促進に関する今後の取組方針」等に基づき、平成27年4月に国から選定を受けた釜石市沖再生可能エネルギー実証フィールドでの研究開発や、本県沿岸北部における着床式洋上ウィンドファームの実現の取組を進めています。

今後、海洋再生可能エネルギーの実用化、事業化のためには、国による研究開発の推進や関連研究施設の整備のほか、海域の利用調整ルールづくりなどが重要となっていることから、以下のとおり要望します。

《 要 望 事 項 》

1 海洋再生可能エネルギーの研究開発の推進と関連研究施設の整備

国の「海洋基本計画」に掲げる海洋再生可能エネルギー利用技術開発の確実な進捗と被災地の産業基盤強化を図るため、本県において、海洋再生可能エネルギーの研究開発を推進するとともに、国により選定された釜石市沖海洋再生可能エネルギー実証フィールドの利活用促進に必要な関連施設の整備を行うよう要望します。

2 洋上風力発電施設等の整備に対する補助制度の創設

企業等が行う洋上風力発電施設等の整備に対する補助制度を創設するよう要望します。

3 海域の利用調整ルールづくり等による沿岸域の総合的管理の推進

海域の利用調整ルールづくりなど国による沿岸域の総合的管理の仕組みを構築するよう要望します。

【現状と課題】

1 海洋再生可能エネルギーの研究開発の推進と関連研究施設の整備（海洋エネルギー実証フィールドの設置）

- 県では震災前から、三陸の海の資源である海洋エネルギーを生かし、新産業・雇用創出と地域振興を目指しており、平成 27 年 4 月 3 日付けで岩手県釜石市沖が海洋再生可能エネルギー実証フィールドとして選定されたところ。
- 当該海域では、NEDO による波力発電技術の研究開発が進められるとともに、平成 27 年 12 月には岩手県海洋エネルギー産業化研究会が設立され、地域企業を中心となった海洋エネルギー関連産業の創出に向けた取組が進行中。今後、さらなる海洋エネルギー研究開発プロジェクトの誘致や実証フィールド関連施設整備を進め、国際的海洋エネルギー研究拠点構築を目指すもの。
- 実証フィールド関連施設には、研究棟、海底ケーブル、受変電設備などがあり、設備整備に多額の費用を要することから、国による財政支援が必要。

2 洋上風力発電施設等の整備に対する補助制度の創設

- 本県沿岸北部は、遠浅な海底地形と豊富な風力エネルギーを生かした着床式洋上ウィンドファームの実現を目指し、地元漁業者や発電事業者等と課題解決に向けた研究会活動を行っているが、事業化には調査費や建設費など多額の費用が必要。

3 海域の利用調整ルールづくり等による沿岸域の総合的管理の推進

- 海洋再生可能エネルギー開発・導入における海域利用に際しては、漁業、船舶航行、港湾利用などの既存利用者との調整が必要であるが、沖合では、市町村や県といったエリアにこだわらない利用者がいるため、自治体単位での調整には限界。

《参考：海洋基本計画について》

- 海洋基本法(平成 19 年)に基づき策定される海洋政策の基本指針。海洋に係る産業の振興・創出、安全確保、情報の一元化と公開、人材育成、海域の総合的管理等についての具体的な取組を規定。
- 平成 25 年 4 月の見直しにおいて、海洋再生可能エネルギー開発による国内産業育成について充実。

【県担当部局】 政策地域部 科学 I L C 推進室